
なるようになれ

ZARUSOBA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なるようになれ

【Nコード】

N8144C

【作者名】

ZARUSOBA

【あらすじ】

俺の名前は鈴木修子^{すずきしゅし}子供の頃の将来の夢は『王様になる事』そんな願いなど叶う筈も無く、日々のんびり過ごしていた。そんな俺が高校一年の時だった。ある日寝て起きたら隣に美女が立っているではないか。そして、美女の口から王様になった事を告げられる。しかし、これから俺の苦難が始まる事になるとは知る由もなかった。

第一話「王様」

ここはとある会場。

そこでは、足の踏み場もないほどの黒い塊ができていた。
目の前の壇上では一人の女性がマイクを持って立っていた。

「はい、皆さん〜！ 注目！」

女性は大きく手をぶんぶんと振る。
その後、コホンと咳払いを一つした女性は。

「では、皆さんの待ち望んだ結果発表を行います〜」

黒い塊から大きな歓声が上がる。

「では、今回選ばれた方の名前を挙げさせて頂きます」

女性は手に持っていた一枚の紙切れを広げる。
辺りが静まり返る……

「今回選ばれた方は……鈴木修すずきしゅうさんです！」

女性がそう発言すると、周りは沈黙。

「って……誰？」

――時は20××年、時を同じくして、場所はとある学校へと舞台

を移す。

中では、休み時間を満喫している生徒の姿があった。

「でね、昨日のテレビな」

「まじかよ!？」

ギャハハハと笑い声が響く中で、教室の片隅で一人、ポツンと本を読んでいる男性がいた。

「何読んでるんだよ、修」

一人の男性が、本を読んでいる男性に気軽に話しかける。
本を読んでいた男性は、フウとため息をついた後、本をたたむ。

「なんだよ？　なんか用か、和志」

「なんか用かって……お前、休憩中も本読んで疲れないのか？」

「別に、家帰ってもやる事は本読むか、寝るかのどっちかだからな」

修はあくあと、ため息をつく。

「修、お前、部活とか入ったらどうだ？」

「パス。かつたるいし、すぐに辞めちまうよ」

「あのお前、俺たち高校生だぜ？　今青春を楽しまないと損だぜ？」

「俺の青春はもう終わってるよ」

「はやっ！　おまえ、夢とか無いのか!？」

「夢ねえ」

俺の名前は「鈴木 修」すずき じゅう現在高校1年生。

目の前に居るのは小学校からの腐れ縁の「山本和志」やまもと かずし

俺は、小さい時から何をやっても駄目な奴だった。
運動も、勉強もまるで駄目。

人より優れたところなどまるで無かった。
人生ずるずると退屈な日々を過ごす毎日。
こうして、俺は平凡な人生を過ごしていったとき、めでたし、めでたし。

「いやいや、終わらせるなよ」

隣で突っ込む一志。

「そういえば、小さい時に「将来の夢」とか言う作文なかったか？」

「あゝ、そういえば、そういうのあったな」

「修は将来の夢何だったんだよ？」

「えっ！？ い、いや……そ、そういえば一志は何だったんだよ？」

「俺？ 俺は、今も同じくサッカー選手だ」

フフンと、自慢げに語る自称エースストライカー！

しかし、この高校のサッカー部は万年一回戦落ちなのである。

「それで、修は何だったんだよ？」

「いや実は、忘れちゃった」

否。実ははっきりと覚えている。

俺の子供の時の将来の夢、それは……「王様になる事」

はっきり言って、我ながらアホだな。

この日本と言う国に王権制度はない。

つまり、一生叶う筈が無い夢なのだ。

小さい頃、その事で皆から笑われたのを今でもはっきりと覚えている。

話していると、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響く

「おっと、もうこんな時間か。それじゃあな」

急いで自分の席へと戻っていく一志。

- 何事も無く全ての授業が終了した。

俺は当然の事ながらやる事が無いので、授業が終わると真っ直ぐ家路につく。

「ただいま」

「あら、お帰り」

家に帰ると、母親が出迎えてくれた。

「夕飯ならもうすぐできるから」

「わかった」

俺は鞆を置きに、二階にある自分の部屋へと上がる。

部屋に入ると、周りには本がぎっしりと、棚に詰まっていた。

「そろそろ、整理しないと入らないな」

俺は、鞆を置くと、直ぐに一階の居間に向かった。

そこには、既に夕飯の用意が済まされていた。

「もうすぐ、お父さんも帰ってくるから一緒に食べましょう」

「はいはい」

その後直ぐに、親父も帰ってきた。

俺は家族と一緒に夕飯を済ませて、その後風呂に入る。

風呂から出ると、直ぐに自分の部屋に入る。こうして俺の一日は過ぎていく。

俺はベッドにごろんと横になり、時計を見るとまだ夜の9時だった。

「まだ早いけど……もう寝るか」

俺は部屋の電気を消すと、深い眠りについた。

毎日、毎日、なんか刺激が足りないななどと、僅かながら寝る前に思った。

「……きて」

んっ……何か声が聞こえてくる。

それに、何かいい香りがしてきた。

「おきて……さま」

声が段々はつきり聞こえてくる。

非常に甘く、色っぽい声だ。

「起きてください、王様」

「えっ？」

その言葉に目がぱちちりと覚める。

すると、俺の傍らには俺と同じぐらいの歳と思われる美女が立っていた。

背中の辺りまである黄金のように輝く金色の長い髪。

スラッとした姿勢はモデルを連想させる。

「やっと起きてくださいましたね、王様」

「お、王様？ 王様って、俺？」

「他に誰が居ますか？」

な、何がどうなって俺が王様に？ ってか、この人、どうやって俺の部屋に……ん？

女の人で気がつかなかったが、周りを見回すと、俺の部屋ではなかった。

俺が寝ていたベットは、倍ぐらい大きくふかふかなベットに。

天井には豪華なシャンデリア、周りには微妙なインテリアが。髑髏とか飾ってるけど。

「あ、あなたは一体？」

「申し遅れました、私の名前は「リーシエルトルード・パトリオット・デイス」。

パール・デモントアルモーデイス」と申します」

覚え切れません。そんなフランス料理のような名前。

「あ、あの……えっと……」

「以後、リーシェで構いません」

「すいません、助かります。どうして、俺はここに？」

「鈴木様は「王」になられたからです」

「……王？」

「はい」

「俺が？ 王様に？」

「はい」

な……なんてこったー！！ 一夜にして日本は王権制度になり、いつの間にか俺が王様に任命されたのですか！？
いやいや、そんな事は有り得ない。

となると、実は俺は何処かの王国の王家の血筋を受け継いでいて、その国の諜報員が俺を

連れ戻したという事も……あー！ 訳がわからん！

「……？ どうしたのですか？ 頬をつねりになされて？」

「いや、夢じゃないのかなと思って」

痛い。と言う事は……夢じゃない。

俺は……俺は……王様になってしまった！

「俺、本当に王様に？」

「はい。そして、私はあなたの秘書です」

「秘書！？」

秘書……ああ……なんていい響きなんだ。

しかもこんな可愛い子が秘書だなんて感無量。

「王様、朝食ができております」

そう、リーシェが言うと、扉の向こうから豪華な食事を運んでくる。この際、もうなんで王様になったのかどうでも良いや。王様万歳。俺は頭の思考を良い方向に考える事にすると、豪華な朝食を食べる。

「王様、本日のスケジュールの確認をさせていただきます」

「スケジュール？」

リーシェがそう言うと、ポケットからメモ帳を取り出す。
そして、パラパラとページをめくる。

「本日は、王様のめでたい就任一日目です」

「うんうん」

「ですので、今日は挨拶回りに行くことにしました」

「なるほど、なるほど」

「まずは、王様の威厳を見せ付けるため、愚かな人間共の街を片っ端から叩き潰します」

「なるほど、なるほど……？」

ん？ 今何かさらつとんでもないこと言わなかったか？

「あの、今なんて……？」

「？ 挨拶回りに行く」と

「いえ、その後」

「愚かな人間共の街を容赦なく完膚なきまで叩き潰すですか？」

「そう！ それ！」

っていうか、スケール大きくなってますよリーシェさん。

「？ なにかおかしいですか？」

「おかしい。っていうか、それ挨拶って言わない」

「ん……じゃあ、片っ端から女子供をさらうのですか？」

「……本気ですか？」

「はい（はーと）」

そんな恐ろしい発言しといてニッコリと微笑むリーシェ。

ふふふ、そんなあなたはもう恐ろしいを通り越して素敵です。

「あの、俺王様なんですよね？」

「はい」

「じゃあ、なんでそんな極悪人みたいな事を？」

「えっ？ だって鈴木様は、魔王様ですよ？」

「……あの、もう一度今の発言を聞かせて下さい」

「魔、王様です」

「えええええええええええええええええええええええ！？」

魔王という言葉がエコーになって頭に響く。

朝の浮かれ気分が一気に吹き飛ぶ。

王は王でも「魔」王様だったなんて、えらい違いますよ！？

冷静に、冷静になれ。まずは状況を把握しろ。

事件が起きた時はいつも冷静になれとテレビで言っていた。

「あの、ここどこなんですか？」

今頃になって気づいた俺。

少なくとも、日本じゃないだろう。

「ここは、「アリシユレード」と呼ばれる世界です」

「あ……ありしゅれーど？」

「はい。本来鈴木様が居られる世界とは異なる次元にある世界です」

今の一言は俺の常識の範囲を既にブチギリで超えていった。
日本どころか、ここは地球じゃないですよと言う死の宣告。

「？ どうしたのですか？ 頬をおつねになされて」

「いや、夢じゃないのかなと思って」

うん。痛くない。あれ？ 目から水が……おかしいな。

「あの、俺帰りたいんですが」

「無理です」

極上の笑みを浮かべて0コンマの域で返答してきたこの悪魔。

「鈴木様は魔王に選ばれたため、少なくとも、1年間は魔王としての勤めをしていただかないと帰れません」

「……大体予想できるんですが、魔王としての勤めって？」

「愚かなる人間共を恐怖と絶望の淵に叩き落とし、私たち悪魔の指揮を執って頂きます」

あの、俺もその愚かなる人間なんですが。

「それでは、仕事に行きましょう魔王様」

「えっ？ いや、ちょっと待って！」

リーシエはそういうと、俺の腕を掴む。

すると、突然、空の上にワープしたのだ。

「うわったった！？ お、落ちる！！」

「大丈夫です、魔王様。私の魔力によって落ちる事はありません」

リーシエの言うとおり、俺がどんな体勢になっても高度を保ったままだった。

「下をご覧下さい」

「えっ？」

そう言われて、下を見ると、街が眼下に広がっていた。
人が賑やかに動いているのがよく分かる。

「今からあの街を滅ぼしましょう」

「ちょっ！？ ちょっと待って！」

「？」

このままじゃあ本当に街を滅ぼさなければならなくなる。
何か上手く収める方法は……そうだ！

「リーシエ、街の人と話せないかな？」

「えっ？」

「ほら、その……威厳をみせつけるには話した方がより効果的じゃないかな？」

「なるほど、そうですね、さすがは魔王様」

良かった、上手く騙せたみたいだ。

街の人も俺が減ぼす気がないと意思を示せばきっと解ってくれるはず。

俺たちは徐々に高度を落としていく。

人々の顔がはつきり分かるぐらいの高度までなった時だった。

「聞け！ 愚かなる人間共！」

「へっ？」

突然、リーシェが大きな声を上げる。

街の人達はその声に思わず上を見上げる。

「本来なら貴様ら愚民共には決して見ることができない魔王様が、直々に

貴様らに死の宣告をしてやるとおっしゃった」

えええ！？ いや、言っていない！ 言っていない！

そんな俺の思いとは裏腹に、リーシェの一人演説は続く。

「光栄に思うがいい！ 貴様らは死ぬ前に魔王様のお声を聞くことができるのだからな！」

そういうと、リーシェは俺の方に振り向いて。

「さっ、王様どうぞ。前座はバッチリです」

そういつてウインクをするリーシェ。

下の街からは大勢の人達が俺に向けてあつゝい視線が向けられていた。

俺は、コホンと咳払いを一つした後。

「えゝと、皆さんこんにちは。一応魔王です」

そういつと、街から俺に向けて色々なものが飛んでくる。

やだなゝ、俺はまだ何もしてないのに……

「すごいです！ 話しかけただけで人間共の恨みを買っているなんて」

後ろの方ではしゃぐリーシェ。

……あんたのせいですよ、あんたの。

どうやってこの場を収めようかと考えていると……

「じゃあ、そろそろ？」

リーシェがひよいと俺の方に近づいてきた。

その両手には、ハンマーやら剣やら持っていた。

やだなゝもう、この子殺る気満々ですね。はい。

このままじゃ、地獄絵図ができるのも時間の問題

「リーシェ」

「はい？」

「帰ろう」

「えっ？」

「今日はもうこれで充分じゃないかな？」

「充分って……まだ何もしてませんよ？」

ぶーぶーと楽しみを取られた子供のように言うリーシェ。

俺はもう充分心に傷を負いましたがね。刃物とか飛んできてるし。

「リーシェ！」

「！？ は、はい！？」

「王様からの命令です！ 今日はこちらでお終い！」

「えっ、で、でも」

「でもない！ 今日はこれにてお終い！」

「は、はい！」

そうして、何事も無く俺たちは元いた場所に帰ってきた。

「ぷは〜」

俺は緊張の余り思いっきりため息をついた。

「魔王様」

「えっ？」

リーシェは俺の方をじっと見つめていた。

やばい、さっき何もなかったから怒っているのかな？

せめて家一軒ぐらい破壊させてあげたほうが良かったかな？

「感動しました！」

「は、はい！？」

突然涙目になって顔を近づけてくるリーシェ。

「魔王様は今までの魔王様とは違い、じっくりと真綿を締めるようにじわじわと、」

恐怖のどん底に落とすタイプだったんですね！」

「は！？」

「そうですね、最近の魔王様と言ったら力ずくのゴリラのような方ばかりでしたから」

久しぶりに魔王様らしい方にお仕えできて感無量です」

何やら自己完結しているリーシェ。

とりあえず、結果オーライ？

「そ、そうなんだよ！ わかってくれたみたいだねリーシェ」

「はい！ さすがは人の身でありながら魔王に選ばれたお方ですね！」

よっ、この大悪党なんて声をかけてくるリーシェ。

俺、こんな事1年もしないとイケないのか？

まあ、なんだ。なるようになるかな？

「では、魔王様。後残り120軒の街が残っていますので」
「却下」

第一話「王様」(後書き)

楽しく読んでいただけたら良いとおもっています。
楽しければ全てOKな感じで。

第二話「選ばれた理由」

起きると、いつもの自分の部屋が目に入る。

「……よかつたゝ 夢だつたんだ」

俺は、奇妙な夢からの生還にほつと胸を撫で下ろす。

何やら、下の階からドタドタと誰かが二階に上がってくる。

？ 母さんだろうか？

「王様ー！ 起きてくださーい！」

「ええっ！？」

そこには何故か居るはずの無いリーシェが元気よく飛び込んできた。

「うわあああつー！？」

「きゃっ！？ ど、どうしたんですか王様？」

ガバツと体を起き上がらせる。

俺は即座に辺りを見回した。すると、そこは昨日の悪趣味な寝室だった。

隣には、起こしに来たと思われるリーシェの姿があった。

「な、なにかあったんですか？ 王様？」

「……はあ」

「？」

「夢が現実で……現実が……夢か」

「??？」

あまりのショックにうなだれる俺。
寝て起きたらいつもの日常という、かすかな希望は無残にも打ち砕かれた。

「王様、そろそろ朝食ですよ」

そういうと、昨日と同じように運んでくるリーシェ。
俺は、仕方なくその朝食を口に運ぶ。

「王様、今日のスケジュールを発表しますね」

そう言ってメモ帳を取り出そうとした時。

「あつ、待つて」

「？ どうしました？」

「あ、いや実は、この世界……アリシュレードだったかな？」

「はい。それが何か？」

「どういう世界なのかできれば教えて欲しいんだけど」

そう、実は昨日、結局他の街を散々連れまわされて疲れて寝てしまっただけに

終わってしまったのだ。

つまり、勝手に魔王にされただけで何にも分かってない。

「そうですね、わかりました。でも、その前に」

そういうと、何故か後ろの柵から服を取り出す。

「えっと、何これ？」

「これは王様の服です。その服装は汚いので洗いますね」

「あつ、なるほど」

言われてみれば、服を見ると汚くなっていた。
所々破れている部分もある。

刃物とか避けるの大変だったからな。

「着替えたら下に降りてきてくださいね」

リーシェは部屋から出て行った。

俺はせっせと着替えを急ぐ……だが。

- - 5分後

俺は着替えを終えて下の階に降りてきたのだが。

「ちょ、ちょっとリーシェ！ 何だよこの服!？」

「うわあ！ すごいお似合いですよ王様」

黒いタキシードのような服に黒いマント。
所々にファッションと思われる模様が。

「うんうん。これで、魔王様らしさが出てきましたね」

「いや、出なくていいから」

こんな姿で外に出たら笑われ者だよ。

「けど、これすごいぴったりだね。まるでサイズ計ったみたい」

「はい。計りましたよ」

「えっ？ 何時？」

「王様が寝てる時にサツサつと」

と言う事は、昨日の間にこの服をこしらえたというのですか？
その速さにも驚きだが、勝手に人のサイズを測るのにもおどろいた。
むしろ、プライバシーの侵害だ。

「あ！ あと、王様これを」

リーシェはポケットからなにやら腕輪を取り出す。

「それは？」

「はい、代々魔王になられた方はこれを付ける決まりになっておりますので

付けていただきます」

金色の高価そうな腕輪だ。

俺はリーシェから受け取ると、付けてみる。

「うわぁ！ お似合いですよ王様」

「そ、そう？」

でもなんかサイズがちよつときついな。

俺は一旦腕輪をはずそうとすると……

「ん？ あ、あれ？ と、取れない！？」

「えっ？ あ、本当だ」

「本当だ、じゃないよ！ どうするのこれ！？」

「ん、こんな事初めてですね。でも、お似合いですよ」

「似合えばいいって訳じゃないでしょ！？」

俺がどんなに引つ張っても取れない。

こんなのずっと付けてないといけないのか!?

「ん、仕方ないですね」

「何か方法が!？」

「王様、こうなったら腕を落とせば」

どこからともなく巨大なチェーンソーが出てくる。

いやいや、それ、腕だけじゃすまないよ?

落ちるのはむしろ命の方じゃないか?

「まあ、もう腕輪はいいですハイ」

「えっ? いいんですか!？」

まあ、腕を落とされるよりましですからね。

「さてと、リーシェ、教えてくれないか? この世界の事を」

「はい、それでは……スイッチON!」

突如天井から巨大なスクリーンが下りてくる。
スクリーンにこの世界の地図が映し出された。
それと同時に、何故か眼鏡をかけるリーシェ。

「では、説明させていただきます。この世界「アリシュレード」は

人間と魔族を中心に、他の種族が一杯います。その数約3億！」

「さ、三億！？」

「まあ、約半数は人間ですけどね」

「リーシェは魔族なの？」

「はい。魔族と言っても人間に近い者から、本当に化け物じゃん！？」

「みたいな奴らまで多種多様ですよ？」

「へえ」

「その魔族を仕切るのが、我らが魔王様。つまり、あなたです！」

ビシッ！ と、俺を指差すリーシェ。

その後ヤッタネ！ といわんばかりに親指を立てる。

いやいや、良くないから。

「質問、リーシェ」

「……」

「リーシェ？」

「先生です」

「はっ？」

「今の私はリーシェ先生です、そのところヨロシクお願いします」

くいつ、と眼鏡を上げるリーシェ。

まさかそんなことで眼鏡を？ いやいや、考えすぎか。

「リーシェ……先生、質問です」

「はい、なんですか？」

「どうして俺が魔王になったんですか？」

「それは勿論、公正な審議の上で決定しましたよ？」

この世界に居ない俺を公正な審議の上で？
いやいや、そりゃ〜無理でしょう。

「ちなみに聞くけど、どういう審議を？」
「『魔王様公平に審議委員会』というちゃんとしたものがありますよ？」

めっちゃくちや胡散臭いんですけど!？

「行ってみます？ 審議会場に」
「えっ!?! いけるの?」
「はい、勿論」

非常に気になる。

なぜ自分が選ばれたのか、なぜ自分だったのか。
俺はリーシェの腕に掴まると、昨日のようにレポートをする。

「はい、ここが審議委員会の会場です」
「ここが？ マジ?」
「王様〜、私はいつも大マジですよ?」

リーシェに連れられて来た場所は、大学の教室のような場所だった。
目の前には黒板と教壇、後ろには生徒席らしきものが。
俺たちは、辺りを見回すが誰一人として見当たらなない。

「さすがに誰も居ませんね〜」
「みたいだね〜」

仕方ないので諦めて帰ろうとしたその時。

「むっ？ 誰じゃ？ こんな時期に会場にくるとは」

「あっ！ 王様！ この人、魔王委員会議長のモンタ議長ですよ！」
「えっ！？」

髪は年のせいかわく、髪がぼうぼうに生えて顔が分からない。
かなりの歳だという事だけは分かる。

その風貌からかなりの大物ぶりを予感させる。
杖を使いながらふらふらと歩いていた。

「お久しぶりです、モンタ議長！」

「おおっ！ リーシェか！ 懐かしいの〜」

二人は和気あいあいと話合う。
どうやら、知り合いのようだ。

「今日はどうしたのじゃ？」

「はい。実はこちらの王様がモンタ議長に話があると」
「ほう？」

俺に気づいたモンタ議長は杖をつきながら近づいてくる。

「初めまして、わしはモンタ議長じゃ」

「す、鈴木修です、はじめまして」

「むっ？ 鈴木じゃと？ もしや、魔王の鈴木か？」

「えっ！？ 知ってるんですか？」

「勿論じゃ、何と言っても君を選んだのはこのわしなのじゃからな」

その言葉を聞いた俺は驚いた。

この人が俺をこの世界に導いた張本人……？

「お、教えてください！ どうして俺を選んだんですか!？」

「ま、待て、く、苦しい」

俺は無意識にモンタ議長の肩を揺さぶっていた。

ハッと我に返った俺は手を離す。

「す、すみません。でもどうしても知りたいんです！」

「……分かった、お主には知る権利がある。教えよう」

「あ、ありがとうございます！」

モンタ議長は近くにあった椅子に腰をかけ、一回ため息をつく。そして、ゆっくりと語りだした。

「さて、わしは王がいなくなった時、魔族1億もの数の中から王の選定を任せられている責任者じゃ」

「ど、どのように選定されているのですか？」

「ふむ、いい質問じゃ。王を選定するのは大変でな、公平でなければいけないのじゃよ」

「？ なぜですか？」

「簡単じゃ、力で競い合えば力の強い魔物が勝ち、知識で競えば知識のある魔物が」

勝ち、大食いでも競い合えば力強い魔物が勝つ。これではその分野に突出した

王ができてしまうだけじゃ」

なるほど、一つだけ優れているだけじゃ駄目なのか。

最後の例えに少し疑問が残ってしまうのは気のせいかな？

「では、どうするか？ その答えはじゃな……」
「そ、その答えは……？」

喉がゴクリと鳴る。

今まさに自分が聞きたいことが告げられようとしている。
そして、その答えは！

「くじ引きじゃ」

……ん？

「あの、今なんとおっしゃいましたコノヤロウ？」

予想してなかった言葉を聞いて、言葉遣いがおかしくなってしまう。
た。

まいったな、なぜか拳に力が。

「ま、待て！ なぜ拳を振り上げるのじゃ！？」

「じゃあ、もう一度今の言葉を聞かせてください」

「……KUJIBIKIじゃ」

「ローマ字で言っても一緒だよ！ この野郎！」

「お、王様！ 押さえてください！ モンタ議長も何か考えが！」

今にも殴りかかろうとする俺をリーシェが抑える。

実際問題、何か理由があったとしてもくじ引きは無い！

「じゃあ、なんでくじ引きなんですか？ モンタ」

「……ひどいのう。公平にしなければならんと言ったじゃろ？
くじ引きなら全くの公平じゃ、しかも一億ものくじじゃぞ？」

そんなもので王様を決めようとするアンタもアンタだよ。

あれ？ でもまてよ？

「本当に俺をくじ引きで決めたのですか？」

「うむ」

「じゃあ、それはおかしい。だって、俺はこの世界にいないのに
俺のくじを引いたなんて無理がある」

「ああ、その事じゃな？ ……それはくじを引く直前じゃな、
わしはこのままクジで決めてよいのかどうか迷った」

いや、良くないだろ？ 迷ったのなら辞めろよ。

「こつ、面白味に欠けておった」

おやおや、何やら話がおかしいぞ？ この展開。

何やら嫌々な予感が。

「そこでわしは考えた、何か適当な名前を書いたクジを
一枚クジ箱に放り込んだ。そして、結果は……なんと！
その適当な名前に当たったのじゃ！ ビックリじゃろ！」

俺とリーシェは哑然、呆然。

そして、俺の怒りは言うまでも無く頂点に達した。

「いや、わしも驚いた。まさか適当な名前を書いたのに
その適当な名前の人間が居るとは、奇跡じゃな。……？
あれ？ どしたの？ ふ、二人とも？」

「リーシェ」

「はい、王様」

リーシェはモンタ議長をガッチリ後ろから拘束する。
素晴らしい程の意思疎通。

「な、なにをするんじゃ？ なにやらおぬし等から
凄まじい殺気が迸っておるが？」

その後、モンタ議長は言うまでも無く病院に運ばれた。

第三話「変な幼馴染」

俺は今、広間の王座に座ってひとりポツンとうなだれていた。その原因は、昨日の俺が魔王として選ばれた理由だった。

「……………くじ引きはないだろ」

独り言を言っ、はあゝ、と大きくため息をつく。しかも、1億分の1を引くってどういう運だよ？ そんな理由で選ばれた俺はどうすればいいんだ？と、頭を抱えていると。

「ハゝハツハハハ！！」

「！？ な、なんだ！？」

どこからともなく不気味な笑い声が聞こえてくる。俺は周りを見渡すと、部屋の入り口の上の窓の所に誰かが立っていた。

髪は肩の辺りまでありストレート、髪の色は紫。

頭には小さい角が二本生えており、体はスマートで身長は大体180ぐらいだ。

「君かね？ 人間で魔王に選ばれた奴というのは？」

「だ、誰だ！ あんた！」

「フフン、誰かだと？ ほかあ魔族一のハンサムボーイにして一番の金持ち！ その名は……………トウツ！！」

掛け声と共に男は窓から飛び降りる。

見事な宙返りを披露していたその時。

「王様！今日は偶然にも10mほどの巨大魚が取れたので
お昼は思い切って鍋にしてみました」

と、リーシェが勢いよく入り口を開いて鍋を持ってくる。
10mもの巨大魚を入れた鍋が広間に入ってくる。
勿論、鍋はぐつぐつに煮えたぎっている。

それは見事なタイミングだった。

まるで見計らったかのように宙返りを披露していた男はその鍋に
ダイブしたのだ。

派手な着水音が広間に響き渡り、瞬間。

「ぎええええ%&\$'”@!?!###」

声にならない断末魔が広間に響く。

鍋から飛びでてきた男はのた打ち回る。

「あ、あれ？もしかして？ゼロじゃない？」

「リーシェ知ってるの？」

「はい、私の幼馴染のゼロです。一応これでも魔族の中でも
5本の指に入る大金持ちなんです」

リーシェの「一応これでも」の部分に思わず頷く。

ゼロと呼ばれる男は体を痙攣させながらからうじて生きている様子。

リーシェが呼んだ衛生兵に担架で運ばれていった。
あれだけの火傷は致命傷であろう。
僅かな出番で退場とは哀れな。

- - 30分後

男はあれだけの怪我を30分で回復させて俺たちの前に立っていた。

「いやあゝ、待たせたね、僕の名前は」

「ゼロでした？」

「！？ な、何故その事を！？ ハッ！ そうか……僕ほどの男を既にマークしていたのか、さすがは魔王に任命されるだけはあるな」

そういつて、キザな男はハハハと笑い出す。

いや、さっきリーシェから聞いたし。

それと、魔王に任命されたのはほとんど事故みたいなものだし。

「ゼロ、今日はどうしてこの城に？」

「！？ り、リーシェ！ ああつ、なぜ君がこんなモヤシのようなひよつこのメイドになってしまったんだい？」

メイドじゃない、秘書だから。

「なぜって……決まりですから」

「本来なら僕が魔王に任命されて、君と甘い二人きりの生活の筈だった。」

だが、なぜかこのもやしっ子が魔王になるという手違いが！
…
分からない
何がどうなってこんな事が起こってしまったんだ〜い!？」

議長が、適当な名前を書いて、くじ引きをおこなったからこうなってしまったんですよ。

「……決闘だ」

「……へっ？」

「ぼかあ、君に決闘を申し込む！　そして、勝ったら僕が魔王になる！」

随分唐突だな、この展開。

だが、決闘はマズイ。なにしろ向こうは魔族で、俺は人間。
いくなれば戦車と三輪車の戦いだ。

「……良からう、その勝負の見届け人はこのモンタがしてやろう」

何時の間にかモンタ議長が入り口から入ってきていた。

「あんた何時の間に入ってきたんだよ？」

「なあに、細かい事は気にするでない」

「というか、決闘で魔王決めるとか駄目ってモンタ議長、あんた言っ
つて

無かったか？」

俺の突っ込みにモンタ議長は体をビクツと震わせる。

汗が滝のように流れていく。

……こいつ、まさか忘れてたと言わないよな？

「では、決闘を始めるぞい！！」

「おい！ アンタ絶対忘れてただろ！！」

モンタ議長が勝手に決闘を開始してしまった。

てか、決闘ってやっぱり殴り合いか！？

「では決闘のルールはこのリーシェが説明させていただきます。

リーシェ特製のアップルパイを30分の間で多く食べた方が勝ちというシンプルなものです。勝った方が念願の魔王になれる権利が得られまーす」

広間に長テーブルが置かれ、リーシェがアップルパイを運んでくる。殴り合いでなかったのは幸いなんだが、この勝負で勝っても俺になんの得もないのだが。

「では、スタート！」

リーシェの合図と共に俺はアップルパイを一切れ口に運ぶ。

味のほうは申し分なく、これなら多少はいける。

問題はゼロのほうなのだが、奴はなぜか食べようとしなかった。俺の方を見てフンと笑うだけだった。

まさか、ハンデとでもいうのか！？

「くそっ！」

おれは構わず一切れ、また一切れと口に運ぶ。
残り時間も半分をきったがゼロは動かない。
幾らなんでもおかしい。

「あんた、なんで食べようとしななんだ？」

おれは気になり問いかけてみた。
すると。

「ふふん、ほかあね、実は……り、りんごアレルギーなんだよ」
「……………え？」

その瞬間、俺の勝ちが決まった。

ゼロは負けるとトボトボと帰っていった。

「いやあ〜歴史に残る名勝負じゃった」

ほほほ、と笑うモンタ議長。
名勝負つか、迷勝負だったよな？

「よかったですね王様」
「ん？ あ、ああ……」

結構複雑な心境だ。

おれは負けた方が良かったような気がしてならない。

「ところでリーシェ」

「はい？　なんですか？」

「あいつのりんごアレルギーって知ってたの？」

「はい。ですからあの勝負にしたんですよ」

ははは、どうやら、負ける事は無かったみたいだ。

「リーシェはゼロが王様のほうが良かったんじゃないの？」

「どうしてですか？」

「いや、幼馴染って聞いたし、人間より魔族のほうが魔王らしいし、
こんなくじ引きで決まった王様なんかより」

「どんな理由であれ、私にとって王様はあなたですから」

そういつて満面の笑顔を見せるリーシェ。

うつ……そ、そういわれると何か嬉しいような。

今日だけは少しだけ王様になってよかったような感じがした。

第四話「危機一髪」

訳の分からないリーシェの幼馴染が来てから2ヶ月ほど経った。
俺はリーシェの言われるがまま魔王としての雑務をこなしていた。
上級魔族との会話、部下のしつけ、食材の買出し、庭の枝切り……
あれ？

最後の方は俺じゃなくてもいいよな？

まあ、とにかく、俺の世界では6月、つまり梅雨の時期だが……

「はあ……王様、また雨ですね」

どうやら、アリシユレードでも梅雨の時期はあるみたいだ。
そういつて、リーシェは広間の窓に居る坊主を何個も逆さに吊
るしていく。

……うん、実際、この雨はリーシェのせいかもしれない。

「そうだね、今日で3日連続だね」

「はあ……」

どうしたのだろうか、最近リーシェの様子がおかしい。
顔も赤いし、もしかしたら風邪なのかもしれない。

「王様」

リーシェの目がなにやら潤んでいる。
そうして俺の方に近づいてきて、もたれかかってきた。

「ちよつ！？ 大丈夫なのか？ リーシェ？」

「王様……私、こう雨が續くと……疼くんです」

「えっ？」

その言葉に俺の心臓は飛び出そうだった。

リーシェの顔はほんのり赤く、色づばさがでていた。

元々綺麗なのだが、更に磨きが掛かっていた。

「王様、私と……」

「わ……わたしと？」

一秒が何分にも感じる、俺はリーシェの次の言葉を待った。

そして、リーシェは！

「対戦しましょう」

「いや！ 駄目だよそんな事、だって俺とリーシェは知りあってまだ？」

「……えっ？ 対戦？」

「はい、対戦です」

そういつてニツコリと微笑むリーシェ。

「あゝ、でも、リーシェ、顔赤いけど？」

「大丈夫です、何か体がうずうずしてて動かしたいんです」

そうして、リーシェはその場で踊りだした。

うゝん、元気みたいだけど……？ 何かおかしいぞ？

「王様、もし、王様が私に勝ったら何でも言う事聞いてあげます」

よ？」

「ええっ！！？」

その発言に目が点。

幾らリーシエは普段陽気とはいえ、そこまで突拍子も無い事を言う人ではない。

でも、もし、もし勝ったら本当に？

「リーシエ、本気で言ってるの？」

「勿論ですよ、ほんきと書いてマジです」

「なら、その勝負！ このほかぁ引き受けたーーーー！！！」

「！？ この声は！？」

俺はすかさず声のする方向を見ると、天井のシャンデリアに逆さになって

宙ぶらりんになっていたゼロがいた。

そして、掛け声と共に広間に降り立った。

「あんた、何時からいたんだ？」

「フツ、愚問だね。ほかぁ、何時でもどこでも呼ばれたら出てくるのが信条さ」

「いや、呼んでないから」

あとでこのセキュリティを見直したほうが良さそうだ。
思い切って、地雷とか設置しても大丈夫かもしれん。

「ところで、リーシエ。さっきの話は本当かい？」

「勿論。ゼロが勝った時でも同じでいいわよ？」

「!？ ちよつ、待ったリーシェ!!」

「おつ~~~~け~~~~い!!! その勝負引き受けた」

まずい！ これでもしリーシェが負けたらとんでもない事になってしまう。

な、何とか阻止できないものか!？

「それじゃあ、ボクシングでどうだい？」

「いいわよ」

俺が迷っている間に着々と話が進んでいく。

そして、魔法でリングが瞬時に出来上がってしまう。

「ま、まで！ ゼロ！」

急いで俺はゼロの肩を掴む。

「ん？ なんだい？ 魔王君？」

「お前、リーシェに勝ったら何をお願いする気なんだよ？」

「ん~~~~まだ考えていないね」

……嘘こけ、お前鼻の下伸びてるぞ。

だが、これでこいつの企みがハッキリした。

何が何でもこいつを対戦させるわけにはいかない!!

「おや？ 入り口に見えるのはモンタ議長じゃないのかい？」
「えっ？」

そう言われて振り返ると、確かにそこにはモンタ議長が来ていた。俺はモンタ議長の方に駆け寄る。

「どうしたんですか？ 今日は何？」

「ほっほっほ、実はだな、リーシェの様子を見に来たのじゃよ」

「リーシェの？」

「うむ、リーシェはすこし変わった性質の持ち主だな」

「？ 変わった性質？」

と、話していると後ろからゴングの鐘がなる。

しまった！？ あの野郎！ 勝手に試合始めやがった！！

「おや？ どうしたのじゃ？」

「何か、リーシェが突然対戦したいとか言い出して、それでリーシェが

負けたら何でも好きな事して良いとか言っただけで対戦になったんですよ！」

「な、なんじゃと！ いかん！！」

俺は走ってリングのほうに駆け寄る。

すると、そこにはリーシェが倒れる姿が……あれ？

「ぶるわはあああ！！？」

無かった。

むしろ、信じられない光景が広がっていた。

リーシェは的確にジャブを打ち、ガードを揺さぶり、すかさずボディーブロー。

ラッシュ、ラッシュ、ラッシュの止まらないリーシェの攻撃。

ゼロは最早サンドバック状態。

「や、やはり！ 手遅れじゃったか！？」

後ろから駆けつけたモンタ議長が驚いた表情をしていた。

「？ どういうことですか？」

「リーシェは雨が連日続くと、ハイテンションになる体質なのじゃ」

「は、ハイテンションになるんですか？」

「そうじゃ、リーシェの場合、その時の運動速度、反射神経は普段の5倍にも上がり

アドレナリンが常に分泌している状態になるのじゃよ！」

「えっと……それってすごいんですか？」

「以前この状態になった時があつてな」

「どうなったんですか？」

「……食後の運動とか言つて街2個滅ぼしよつたわ」

「えええええ！！？ 何とか止める方法は！？」

「時間がたてば治るはずじゃが……」

俺はリングのほうに目をやると、それは酷い有様だった。

ゼロの顔面は見る影も無いほど腫れ上がり、立っているのがやっと。一方、リーシェの方はリングを縦横無尽に駆け回るほどの余裕。

「ちょ……タ……イム」

ゼロの声も虚しく、リーシェはとどめに刺しに来た。

瞬時にゼロの懷に潜り込み、そこから顎に問答無用のアッパーカット。

ゼロは綺麗に上空へと舞い上がり場外へ。

リングの上ではバク転を決めるリーシェの姿が。

おれとモンタ議長はゼロのほうに駆け寄る。

「お、おい！ しっかりしろゼロ！」

「ま、魔王君……ほかあ、甘かったよ」

「何言ってるんだ！ まだやれるだろ？」

「き……きみは、僕を応援してくれるのかい？」

「何言ってるんだ、当たり前だろ？」

だって早く立つてくれないと次の餌食は俺になってしまうじゃないか。

「フッフ……（ガクッ）」

あ、気絶した。

ちっ、使えないやつめ。

「つぎは王様ですか？」

リーシェの言葉に背筋が凍る。

振り返ると、殺人鬼は軽やかにリングから舞い降りる。

……フッフ、俗に言う死亡フラグって奴か。

俺は脳味噌をフル回転させて必死に逃れる術を考えた。
考えうる選択肢は……

- 1、モンタを身代わりにする。
- 2、モンタを身代わりにする。
- 3、モンタを身代わりにする。

「ここはやはり無難に3番かな」

「ま、まてい！ 選択死が全て一緒ではないか！」

「まあ、こんなものしか考え付かなかったので」

後、選択肢じゃなくて選択死になってますよ？

「じゃあ次はモンタ議長ですか？」

「いやいや！ わ、わしはパスじゃよ、パス！」

「モンタ議長恥ずかしい過去を言われてもいいんですか？」

「わ、わしの恥ずかしい過去？」

「はい」

「ほっほっほ、残念じゃが、わしは常に潔白でな。そんな
恥ずかしい過去などあるわけが……」

「……パブ『ランジエリー』」

リーシェのその一言にモンタ議長が杖を落とす。
なにやら尋常じゃない汗の量が。

…… あんた潔白言ってたのに、既に黒なの丸分かりじゃないか。

「良かろう、リーシェよ、お主には少し現実を教えてやらねばなる
まい」

リーシェの一言でモンタ議長はヤル気に。
そして、勝負方法は……

「じゃんけんじゃ」

……何と言つか、一気に熱冷めたな。
他に方法あるのでは？

「ちょっと、モンタ議長、他になかったんですか？」
「仕方あるまい、普通に戦えば100%死ぬぞ？　じゃんけんなら死ぬまい」

俺たちは小声でひそひそと話し合う。
確かに、じゃんけんなら死なないだろう。

「ゆくぞ、リーシェ！」

「はい」

「最初は……グー！」

した瞬間、リーシェはグーでモンタ議長を殴っていた。

モンタ議長の体は凄い勢いで壁にぶち当たった。

そのまま系が切れた人形の様に倒れた。

リーシェは冗談で殴ったと思われるが、威力はシャレになってない。

……訂正、じゃんけんでも死ぬるな。これ。

リーシェは俺の方に顔を向ける。

「じゃあ……次は王様ですね？」

何時もの優しい口調が今は恐怖を駆り立てる。

参ったな、これはホラー映画より怖い。

じりじりと、にじみよってくるリーシェ。

相手はじゃんけんで殺しにかかるキラマシーン……どうしよう。
実際、何やっても殺されるんじゃないのか？

「さあ……早く、対戦しましょう?」

ヒイイイ!! 怖い! 怖すぎる!
な、何か考えて……そうだ!

「わ、わかった! リーシェ、対戦だ」

「はい」

「リーシェ、対戦方法は……」

「方法は?」

「お互い同時に寝て、先に寝たほうが勝ちというルールでどうだ?」
「いいですよ」

よっし! これは勝負なのか? と疑問はあるがリーシェは承諾した。

そして、広間で離れて横になる二人。

「じゃあ、スタート!」

おれの掛け声で勝負は始まった。

それから、3分位経っただろうか……おれはリーシェのほうに近寄った。

「……よし、寝てるみたいだ」

先に寝ても後から寝ても勝敗は分からない。
何というベストな勝負を考えたのだろうか俺は。

「ふー、これで一軒落着」

だが、その油断が命取りだった。

「うーん……」

「えっ？ うわぁっ！！？」

リーシェは近くにいた俺に抱きついてきたのだ。

リーシェの顔が直ぐ目の前にある。

（こ……この状態はやバイ！ ヤバ過ぎる）

リーシェを起こせば、地獄が待っている。

リーシェを起こさずとも、この状態のままいるのは、ある意味地獄。

（だ、だれか助けてー！！）

この1時間後にこの状態を目撃したゼロによって助け出された。
その後、ゼロに質問攻めされたのは言うまでもない。

第五話「ななばた」

「王様、実家に帰らせていただきます」

リーシェが自分の倍ぐらいの風呂敷包みを肩に背負って広間にいた俺の元に

やってきていた。

……開口一番それですか。

「ちよつ、ちよつと待って！ ど、どうして!？」

「実は明日、『ななばた』の日なんですよ」

「な…ななばた？」

「はい」

ななばた……？ 七夕じゃなくて？

「えつと……七夕じゃないの？」

「七夕？ なんですか？ それ？」

うーん？ アリシユレードでは七夕の事をななばたなのかな？

「えつと、七夕って言うのはね、笹に願い事を書いた短冊をくくれば願いが叶うって行事なの」

「す、すごいですね！ それなら、あつという間に人間を滅ぼせるじゃ

ないですか！」

リーシェの驚き具合からして、どうやら全く違うみたいだな。あと、そんなの願わないでくれ。

「じゃあ、リーシェのななばたはどんなの？」

「ななばたはですね、どんなに忙しくても年に一度のこの日は必ず実家に帰るっていう決まりになってるんですよ」

「へえ、ちよつと違うけど織姫と彦星みたいだな」

「オリヒメ？ ヒコボシ？」

「そう。向こうの世界じゃ、織姫と彦星はいつも離れ離れなだけで七夕の日だけ一緒になれる星の事なんだけどね」

「うわあ、ロマンチックですね」

「そ、そう？」

「はい、出会えたら何を話すんでしょうかね？ やっぱ、給料が安いとか、

浮気はしてないかとか？」

目を輝かせて話すリーシェ。

ロマンチックのかけらも無い事いわないでくれ。

「それでは王様、明日は王様一人ですが、あさってには帰って来ますので」

そういつて、手をブンブン振って城からリーシェは出て行った。

……明日は俺一人か。

- - 次の日。

城内は、ななばたの為もぬけの空も同然だった。

いつもなら、色んな使い魔や魔族がドタバタしてるのに…

「…うん、仕方ない、あそこに行ってみよう」

実は以前、城内をリーシェに案内された時に行きたかったところがあつたのだ。

あそこならいい暇つぶしになりそうだ。

俺は城の地下へ地下へと降りていく。

そして、目的の場所へとたどり着く。

目の前には大きく分厚い木の扉があつた。

俺はそれを両手で思いつきり押す。

すると、扉が開いた先には見渡す限りの本棚の山があるではないか。そう、ここは城の中の図書館なのだ。

向こうの世界でも本ばっか読んでたから、俺にとってはいい暇つぶしだ。

俺は適当に本棚から本を何個かチョイスして椅子に座る。

「何々…」

『誰でもできる心臓の抜き方』

『魔族200種類あなたも魔族マスター!』

…なんか凄いタイトルばかりだな。

「おっ…これは」

タイトルは『歴代魔王について』…これにしとくか。

俺はペラペラとページをめくる。

『魔王は今まで数え切れないぐらいの魔族がなっていたが、その中でも群を抜いていたのが、初代魔王「ルシフェル」である…

彼はそのずば抜けた魔力でこの世界、「アリシユレード」を作ったと

されている。それから2代魔王「ベルゼルフ」が他の魔族を束ねた。

それ以来、魔王が魔族を束ねる事になった。

しかし、4代魔王「バリス」の時人間と魔族の大戦争が勃発。それ以来、人間と魔族が離れて暮らす結果になる』

ふ〜ん、なるほどね……

「……こんにちは！」

「えっ!？」

俺は声のした方向に目をやると、そこには短い髪で金色、体は華奢。そして、なぜか縦じまのストライプの水色パジャマを着た少年がいた。

見た感じ小学生か？ 小さい身体で無邪気な顔をしていた。

「お兄ちゃん、魔王さんだよね？」

「あ…ああ、まあ」

おかしいな？ 今日は皆ななばたで帰るって言うてたのに。

「君は帰らないのか？」

「えっ？」

「いや、今日はななばたで皆実家に帰るって筈じゃ……」

「ないもん……家」

あ、そういうことか……しまったな。

「わ……悪い、変な事聞いちゃったな」

「うっん、あんまり気にしてないからいいよ」

とは言うものの、何か悪いな……よし！

「君、名前なんていうんだ？」

「……ウィル」

「よし！ ウィル、兄ちゃんと一緒に遊ぶか」

「えっ？」

「皆ななばたで楽しんでるのに、ウィルだけ楽しんでないのは不公平だろ？」

幸い、今城の中はもぬけの空だし、何でもやりたい放題だ！」

まあ、俺と遊んで楽しいかどうかは分からないけどな。

それでも、一人でいるよりマシではないだろうか？

「どうだ？」

「……い、いいの？」

「ああ」

「うん！ 兄ちゃんと遊ぶ！」

そういつて俺に抱きついてくるウィル。

そんなに嬉しいのか？ だったら、こりゃ本気で楽しませないとマズいな。

その後の俺は酷いものだった。

この広い城の中でかくれんぼやら、鬼ごっこ。

はたまたボール遊びに、ボードゲーム。

俺は既にボロボロだった。

「タ……タイム、ちょっと休もう」

「えゝ、もう休むの？」

「む、無理、これ以上は無理」

俺は玄関のロビーにごろんと横になる。
その隣に座り込むウィル。

「う、ウィルって……もしかして魔族？」

「うゝん、厳密に言うと魔族かな？」

なるほど、そんなに運動しても平気なものには納得。
あれだけの運動をしたにもかかわらず、
いまだ息切れすらしていないスーパージビツ子。

「じゃあ、ウィルはどうしてこの城に？」

「それは、お兄ちゃんがいるからきたんだよ？」

「えっ？ 俺？」

「そう、お兄ちゃん、この世界はどう？」

「どうって……まあ、始めは結構不安とか一杯だったけど、今は
結構楽しいかな？」

うん。嘘は言っていない。

だが、人間滅ぼせーとかは勘弁して欲しいが。

「そう、良かった」

「？」

「お兄ちゃんの魔王としての任期は後9ヶ月、有効に使ってね？」
「えっ？」

ウィルはそう言って微笑んだ。
どういう意味だ？

「ウィル？」

「お兄ちゃん、今日は楽しかった」

「そっか、そりゃ良かった」

そういわれれば遊んだ甲斐があつたものだ。

「あのね、お兄ちゃん」

「ん？」

ウィルは照れくさそうに。

「ま……また遊んでくれる？」

「ああ、勿論」

「ほ、ほんとうに？」

「俺でよかったらな」

「うん！」

「よし、それじゃあ今度は何を……」

すると、突然玄関の扉が開く。

「王様ー！！」

「！？ リーシエ？」

「はい、リーシエル・トルド・パトリオット・デイス・パール・デ
モント

アルモードイス只今戻りましたー！」

ピシッと敬礼をするリーシエ。

ああ、そんな長い名前だったね。

「あれ？ 明日じゃなかった？ 帰ってくるの」

「王様一人じゃ寂しそうだと思って直ぐに帰ってきたんです。王様、ロビーで何してるんですか？」

「あ、いや、ウィルって言う子供と遊んでね」

「えっ？ 子供ですか？」

「ほらそこに……あれ？」

確かにそこにいたはずのウィルは忽然と姿を消していた。

「あれ？ どこに行ったんだ？」

「王様ももしかして、幻でもみたんじゃないですか？」

「いや、そんな訳……」

…… また会えるか。

俺は余り深く考えないようにした。

「王様はもう夕飯とか食べたんですか？」

「いや、全然。腹へって死にそう」

「よかつた、実は実家から……」

後残り9ヶ月で魔王としての任は解かれる。

ただそれだけ。

それだけだ。

第六話「コンテスト」

「お兄ちゃんの魔王としての期間……有効につかってね」

ウィルの言葉が頭に響く。

うーん、どういう事だろうか？ 有効にと言われてもな。

ガシガシと頭をかきむしる。

確かに、俺は魔王になっても何もしてないしな……。
などと考えていると。

「こんにちは、元気かい？ 魔王君？」

嬉しそうにスキップしながら俺に近づいてくるゼロが入ってきた。

「嫌な予感がするから帰ってくれ」

「OH、つれないね、魔王君、君にとってもいい話があるんだが」

ニンマリと笑うゼロ。

ムツ、ゼロから話を持ちかけるなんて天変地異の前触れか？

「実はコレなんだよ、魔王君」

「こ、コレは!？」

ゼロは俺にチラシを見せる。

そこには、『第120回 水着美女コンテスト』なるものが

「ゼロ、これにでるのか？」

「出るわけないだろ？ これに出るぴったりの人がいるじゃない

？」

「……まさか、リーシェ？」

「そう！ リーシェが出れば一位だよ！」

「リーシェが出るわけ無いだろ？」

「魔王君が言えば必ずリーシェも出てくれるよ」

「……おいおい」

ふう、とため息を一つ。

俺の答えは既に決まっている。

そして俺は……

「うわゝ、凄い広いですねこのデパート」

「だろゝ、なんたつて僕の子会社だからねゝ」

水着を買いにゼロの進めるデパートに来ていた。

まあ……その……本能には勝てなかった。

恥も外聞も無く正直に言つと、リーシェの水着姿が見たい。

「うゝん、だけど……」

「どうしました？ 王様？」

「いや……実は、俺の世界のデパートと似てるからビックリ」

「えっ！？ そうなんですか？」

「へえゝ、それは僕にとつても興味深い話だねゝ」

ガラスのショーウィンドウに商品が展示されている。

そして、今俺たちはエスカレーターで水着売り場まで上っている。

各階で売っているものが違う。

何から何までソックリだ。

そうこうしている内に目的の水着売り場に到着した。

「すごい種類がありますね」

フロア一面水着だらけ、それは正に圧巻ものだった。

「じゃあ、俺たちは向こうにいるから、水着買ったらここで待ち合わせね」

「はい、わかりました」

そうして、俺とゼロは男物の水着の場所に移動した。

「やっぱりトランクス系かな？」

俺は無難な水着を買ってゼロのほうに向かうと……

「おわっ！？ お前何してんだよ！？」

「ん？ なにかおかしいかい魔王君？」

ゼロの奴はぴちぴちの海パンを試着していた。
ブーメランパンツと言う奴だ。

「たのむから、それはやめてくれ」

「魔王君、こういうのは苦手なのかい？」

あのギリギリ度はマズイ。

俺の気も知らずにゼロはポーズをとる。

俺の説得で、ゼロもトランクス系にしてもらった。

俺たちは海パンを買って待ち合わせ場所に帰ると既にリーシェが帰ってきていた。

「あ、待たせた？」

「いえ、私も今来たばかりです」

「それじゃあ、帰ろうか？」

「はい」

そうして、俺たちは城へ戻っていった。

- - 次の日。

俺たちは水着コンテストが行われる海辺へときていた。辺りには埋め尽くすほどの人と魔族が。

「リーシェ、大丈夫なのか？」

「えっ？ なにがですか？」

「いや、人と魔族が一緒だけど……」

「大丈夫です、こういう時は争い事は無いです。皆楽しみたいんですから」

それだったら、何時もこういう風にして欲しい。

「それじゃあ、着替えたらここらで待ち合わせね」

「わかりました」

そういつて、更衣室へと向かう。

俺はさっさと着替えて海辺へと戻り、場所を確保する。すると、イキナリ後ろから目を覆い隠される。

「うわっ、もしかしてリーシェ？」

俺は後ろを振り向くと。

「やあ、魔王君」

……一瞬、殺意が芽生えてしまった。
ちょっとドキッとした俺が馬鹿だった。

「……なんだ、ゼロか」

「なんだとは酷いじゃないか？」

「リーシェは？」

「うーんどうしたんだろうね？　ちょっと見てくるよ」

そう言つてゼロは更衣室の方に走つていった。
俺は黙々とパラソルやマツトを準備していく。
すると、後ろから背中をトントンと叩かれる。
くそつ、またゼロか。

「なんだ？　何か忘れ物かぜ……」

「どうですか？　王様？」

ヤバイ、死んだ。

というより、俺は死んでるのではないだろうか？

そこには眩い姿の天使が舞い降りていた。

白いワンピース姿のリーシェが立っていた。

……息ができない。

「似合つてませんか？」

「ななななな……そ、そんなことない！　もうバッチリ！」

「ありがとうございます」

そついつてニツコリと微笑むリーシェ。

俺の胸に衝撃が走る。……もう駄目。
死亡原因はそのスマイル。

「おっと、リーシェ、ここにいたのかい？」

リーシェの後ろからゼロが帰ってきた。

その声でハッと我に返る。

いかん、いかん。今回だけは助かったよゼロ。

「あつ、ゼロ（ニコッ）」

「……（バタッ）」

「ど、どうしたの！？ ゼロ」

あつ、死んだ。

うんうん、その気持ちわかるよゼロ。

その後、なんとか生き返ったゼロと共に3人で海で遊んでいた。
そして、水着コンテストの時間になり砂浜に設置された
特設会場へと足を運んだ。
そこは溢れんばかりの人がいた。

「お前らー！ 水着は好きかー！！」

「おー！！」

「水着の為に……死ねるかー！！」

「オー！！」

「ヨッシャー！ お前らの心意気しかと受け止めたぜー！！」

これより、第120回 水着美女コンテスト開催するぜー！！
「待ってマシターー！！」

司会者の声に反応して観客が大いに盛り上がっていた。
というか、水着の為に死ねるのか。

「なあ、ゼロ」

「ん？ なんだい魔王君？」

「これって賞品とかあるのか？」

実の所、俺はリーシェの水着姿しか考えてなかった。
水着コンテストというからには何か賞品があるのだろう。

「フフン、1位になると何と「ゼロと行く1泊2日の旅行」が
もらえるのさ」

「ふーん、たいした事ない……えっ！！？」

ゼロってまさか…

「お前、はめたな！？」

「何をいつてるんだ？い？ このコンテストは僕の会社が主催して
いる

コンテストでね、前回まで普通の旅行券だったんだけどね、
なぜか今回に限ってこんな事になってしまったんだよ」

「なんで今回だけなんだよ！！？」

「まあ、それは大人の事情って奴？」

既にコンテストは始まっており、止める事は不可能。

俺にできることと言えばリーシェが一位にならない事を
祈るだけ。

「それでは、続いて、NO9のリーシェさんのご登場！」

リーシェが舞台の端から出てくると、割れんばかりの歓声が
うつ……まずいかも……

だけど、他の人も凄い美人揃いだからまだわからな……

「リーシェさん、どこかチャームポイントとがありますか？」

「いえ、残念だけど無いんです（ニコツ）」

いつかー！ん！！ そのキラースマイルは！！！！

リーシェが微笑んだ瞬間、会場の所々でため息が。

まずい！ このままでは本当に1位にされてしまう！！

「いや、今回も素晴らしい人ばかりの水着コンテスト、
それでは、特別審査員長のモンタ議長、何か一言」

……え？ モンタ議長？

審査員の席を見ると確かにモンタ議長の姿が。

「ほっほっほ、今回はレベルが高すぎますな、
選ぶのに迷いますわい」

「そうですね、では休憩を少し挟んだ後、優勝者の発表を
モンタ議長からお伝えしていただきましょう」

ワイワイと騒がしくなる観衆達。

俺はこっそりと審査員席の裏側へと移動する。

「モンタ議長、モンタ議長」

「ん？ おお、鈴木君かね」

俺はモンタ議長を舞台の裏側へと誘導する。

「モンタ議長、今のところ一位はだれなんですか？」

「ほっほっほ、それは教えられんな」

「……リーシェですか？」

「……さてのう」

むむむ、このままでは教えてくれそうにないな…
仕方ない、あれを使うか。

「いいんですか？ モンタ議長？」

「ほっ？ 何がじゃ？」

「パプ「らん…」

その言葉を言おうとすると、モンタ議長が口をふさいできた。

「お主……酷くないか？」

「だったら、教えてください」

「リーシェじゃ」

あちゃー、やっぱりか。

だが、これでこのままにしておくわけにはいかなかったな。

「モンタ議長の方でリーシェを1位にしない様に

何とかありませんか？」

「ほっほっほ、それは無理じゃな」

「……わかりました、こつちにも考えがあります」

「ほっ？」

「モンタ議長の恥ずかしい過去を魔王の権限で世界中にばら撒く
ことにします」

「なっ……なんじゃとー！！！？」

うむ、我ながら素晴らしいアイデアだ。

ウィルの言った有効に使ってというのはこういうことか。

「お……鬼！ お主は悪魔じゃ！！」

「悪魔で結構です。しかし、モンタ議長が何とかしてくれるのならこの事は伏せておきますが……？」

「ぬぐぐぐ……わかった」

こうして、ゼロの野望を未然に防ぐ事ができた。

「それでは審査委員長の優勝者の発表」

「うむ」

音楽と共にモンタ議長が優勝者の書いた紙を開く。
そして。

「今回の優勝者は……NO8のアリーシャさんじゃ」

観客から大きな歓声があがる。

だが……隣の男からは悲鳴が上がっていた。

「な……なぜだい！？ ぼ、ぼかアリーシェが勝つように
仕組んだはずなのに！？」

「残念だったな、ゼロ。悪は滅びるんだよ」

と、肩にポンと手を置く。

がんばって、あの綺麗な人と一泊二日の旅行行ってらっしゃい。
コンテストも終り、城へと帰る途中。

「リーシェ残念だったね」

「いえ、やっぱり私なんかが一位になんかなれませんよ」

「そんなこと無いよ、俺はリーシェが一位だと思ってたよ」

まあ、本当は一位だったんだけどね。

ごめんよ、リーシェ。

「そういえば、ゼロの奴は？」

「あつ、なんか優勝賞品についてなんか揉めてるらしいですよ？」

策士、策に溺れるという奴だな。

「また行きたいですね海」

「そうだね、また来……」

そう言い掛けて俺は言葉を止めた。

来年……そっか、俺は来年にはここにはいないんだった。

「どうしました？ 王様？」

「うつん、なんでもない」

とりあえず、来年の事を考えるのはやめよう。

まだ、俺はここにいるんだから。

第七話「祭り」

水着コンテストが終り、俺とリーシェはそれから何事も無く過ごしていた。

まあ、最近が騒がしすぎただけだね。

ある日、俺とリーシェが街に買い物に行った時だった。

その日は街が異常な盛り上がりを見せていた。

「なあ、リーシェ」

「はい？ なんですか？」

「何だか今日は街が騒がしいみたいだけど？」

「そうですね……あつ！ あれじゃないですか！」

リーシェはそう言つて指差す。

指差した所には、壁に張り紙が張つてあつた。

「何々？ 今日は『祭り』の日です？」

「あつ、そうでした」

リーシェは思い出したように手をぼんと叩く。

「今日は山の上で祭りがあるんです」

「えっ？ 何の祭り？」

「それは……えっと……忘れちゃいました」

てへつと、舌を少し出して誤魔化すリーシェ。

くっ、可愛いから許す！

「祭りか……」

「あの、王様」
「ん？」

リーシェが顔を少しうつむき加減で話して来た。
どうしたんだろ？　なんかモジモジしてるけど？

「何？　リーシェ」

「よ、良かったら！　祭りに行きませんか！？」

「ん？　……うん、丁度俺も行きたかったんだ。リーシェと一緒に
ら是非喜んで」

「本当ですか？」

「勿論。俺の方が頼みたかったぐらいだよ」

リーシェの顔がぱあっと明るくなる。

うつ、その笑顔は眩しすぎる。

そうして、リーシェと俺は夜の祭りに向けて城に帰った。

そして夜になり、俺とリーシェは山の上の祭りに向かった。

「うわゝ、色んな出店が出てますね」

「うん、そうだね」

祭りの会場では溢れんばかりの人が歩いていた。

無邪気に走り回る子供に、食べ物売る大人。

泣いている子供もいた。

「懐かしいな」

「あれ？　王様の世界では祭りしないんですか？」

「いや、やってるけど、こんなに盛大なものは年一回あるかどうか」

「じゃあ、今日は楽しみましょうね王様」

リーシェがぐいぐいと俺の手を引っ張る。

「うわっ！？　ちょ、ちょっとリーシェ？」

「ほら、早く行きましよう王様！」

今日のリーシェは凄く元気だな？

やっぱり、祭りが楽しみだったんだな。

そうして、初めの出店に向かうと。

「はい、いらつしゃ……」

「……よ、よう」

よく知る顔の方が焼きそばを売っていた。

そのお方は俺たちの方を見るとプルプルと肩を震わせる。

「な、何をしてるんだ君たちは！」

「いや、祭りを楽しんでるだけだよ？」

「ぼ、ぼかあ、君たちがデートしてるようにしか見えないけど！？」

「な、何言ってるんだよ！？　俺たちは純粋に祭りを楽しみにきてるだけだよ！」

なあ！　リーシェ！？」

リーシェに問いかけると、なにやらボーっとしていた。

？？　どうしたんだ？　今日のリーシェは？

「リーシェ？」

「えっ？　あ、は、はい！」

「どっちにしろ、ぼかあそんな事認めるわけにはいかないね！」

そういうわけでこの出店はヨネさんに任せて、僕も一緒に行動

「させてもらっよ！」

そうして、結局ゼロも一緒に行動するハメに。いつもながら無茶苦茶な理屈だな。

後、ヨネさんって誰だよ？

そうして、何時ものメンバーに揃ったことで出店を見て回る。射的にくじ引きに綿飴、懐かしいな。

「そういえば、ゼロ」

「ん？ なんひゃい？ まおうふん」

「……とりあえず、そのイカ焼き食ってくれ」

「ん、それでなんだい？ 魔王君？」

「ゼロはこの祭りが何の祭りか知ってるか？」

「はっは、この僕にとってそれは愚問だね。確か……」

「確か？」

「……あれ？ 思い出せない」

てへつと、舌を少し出して誤魔化すゼロ

くあー！ 許さん、絶対許さん！

貴様のその行動は万死に値する！

結局、ゼロもリーシェも何の祭りか分からずじまい。

まあ、祭りって楽しいから何の祭りか分からなくてもいいか。そうして、大体出店も見えて回った後。

「それじゃ、帰りますか？ 王様」

「あれ？ 花火とかは無いの？」

「？ 花火？」

リーシェとゼロが不思議そうな顔で俺の方を見つめる。
おや？ 祭りがあつて花火が無いのか？

「花火って何だい？ 魔王君」

「花火というのは、夜空に打ち上げる火薬玉かな？」
「へっ」

うーん、アリシユレードには無いのか。

仕方ない、花火が無いのなら帰るしかないか。

「それじゃあ、帰りますか？」

「うん、そうだね。それじゃあ……あれ？」

「どうしました？ 王様」

「いや、財布が無いんだ……」

「えー！？」

「ごめん、リーシェ先帰つてて！」

「ちよつと！ 王様！」

俺は急いで来た道を戻る。

「まずいな、確かトイレの前まではあつたから」

俺は出店の通りから離れて人気の無い暗い林の方に入る。

「あるとしたこの辺なんだけど……どわっ！？」

俺が探していると、突然後ろから凄い衝撃が走る。
その衝撃で俺は前に思いっきり倒れる。

「な……ななな？」

倒れた俺の背中に誰かが乗っている。

俺は顔を起こして、背中を見ると。

「こんばんは！ また会ったね、お兄ちゃん」

「う、ウイル！？」

ウイルはひまわりのように明るい笑顔で俺に話しかけてきた。

「う、ウイル悪いが降りてくれないか？」

「あつ、ごめん」

ウイルに退いてもらうと、俺は服に着いた泥をはたく。

「ねえ、お兄ちゃん一緒にあそぼ！」

「あー、悪い、ちょっと探し物してるんだ」

「探し物？」

「コレくらいの茶色の物知らないかい？」

俺は手で大体の形と大きさをウイルに示す。

それを見たウイルは。

「あつ、もしかしてこれ？」

「！ そつ、それだよ！ 何処で！？」

「何処つて、ぶつかった時におにちゃんの服から出てきたよ？」

「えっ？」

あちゃー、上着のポケットに入れていたのか。

俺はとりあえずウィルに財布を返してもらっ。

「ありがとうな、ウィル。それじゃあ……」

俺は帰ろうとしたが、ウィルは俺のズボンを引っ張って離れようとしなかった。

「お兄ちゃん遊んでくれるんじゃないの？」

ウィルは期待に満ちた目で俺を見つめる。

まあ、財布が見つかったのはウィルのおかげではあるんだが、残念ながらこんな夜に遊ぶのもな、うーん……

「ウィル、残念だけどこんな夜中じゃ遊べない」

「えっ」

「けど、一緒に出店を回る事はできるぞ？」

うむ、これしかない。

もうウィルも出店を見て回っているかも知れないが、二人で見ると結構変わってくるものだ、多分。

俺の申し出にウィルは。

「……だめなの」

「えっ？」

「ここから離れられないから……」

「な、何で？」

「約束してるから」

うーん？ 誰かと待ち合わせしてるのか。それなら！

「ウイル、ちょっとここで待ってる?」

「えっ?」

「すぐに戻る! いいか? 待ってるよ!」?

そうして、俺は出店の通りに戻って取りあえず目に付くものを買
あさり

ウイルの元に戻る。

「お兄ちゃん、それどうしたの!」?

「いや、ウイルが離れられないならこうして持ってくるぐらいし
かないだろ?」

我ながら凄い買い込みようだ。

お面に綿飴、イカ焼き、水風船のヨーヨーなどなど。

でもなく、これでウイルが喜ぶかどうか……

「ありがとう! お兄ちゃん!」

「あ、ああ」

とても喜んでくれた。

ウイルは食べ物全て平らげ、ヨーヨーで遊んでいた。

「なあ、ウイル」

「ん? 何?」

「何時までここにいるんだ?」

「もうちょっと」

こんな暗い所に一人で待ち合わせとは。
もうちょっと明るいところで待ち合わせすればいいのに。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ 何だ？」

「お兄ちゃんって、なにか願いとかが無いの？」

「えっ？ 願い？」

「うん。こつ、世界中のお金がほしーいとか、人間ほろぼしたーいとか」

「うーん、願いねえ……」

そう言われて俺の口からすぐに出た言葉は。

「……もとの世界に帰りたいかな？」

「！ 駄目！」

「？ ウイル？」

「そんなの絶対駄目！ お兄ちゃんいなくなったら僕、一人になっちゃうもん」

「お、おいおい」

ウイルスは目に涙をためていた。

うーん、そんなに俺を思ってくれるのはありがたいが。

「大丈夫だよ、ウイルスなら友達の一人や二人すぐにできるよ」

「駄目！ お兄ちゃん行っちゃ駄目！」

「ウイルス……」

「なんで？ お兄ちゃんここにいたら何でもできるんだよ！？」

何でも願いが叶うんだよ？ 皆言う事聞くんだよ？」

「いや、それは無理だよ、現に聞いてないし」

「それは、お兄ちゃんが魔王として命令してないからだよ」

「魔王として？」

「うん」

魔王として？ どうやってだよ？

「どう？ これでお兄ちゃん帰りたくなかったでしょ？」

「……それでも、俺は帰らないと行けない。ごめんな、ウィル」

「どうして？」

「俺を心配してる人もいるし、向こうの世界でやる事もある」

「……」

「俺はこつちの世界の人間じゃないから」

「……嫌だ」

「ウィル？」

「ヤダ！！ お兄ちゃんの馬鹿ー！」

「あつ、おい！ ウィル！」

ウィルは出店の通りに向かって走っていった。

俺も後を追っていくが。

「あれ？ おかしいな？」

いつの間にか見失っていた。

俺は必死に辺りを見渡すが、何処にもいなかった。

「王様ー！」

「あれ？ リーシエ？」

「さ、さがしましたよ」

「リーシエ、この辺りでコレぐらいの背で、髪が金色の子供見なかった？」

「えっ？ いえ……それに、それ位の子供周りに沢山いますからね」

「そっか……」

ウィルの奴、大丈夫だろうか？

変な事に巻き込まれてないといいんだけど。
その時、空で大きな音が響く。

「あれは花火!？」

「うわぁ、綺麗ですね」

「リーシェ、花火はこの世界無いつて言っただけだ?」

「えっ? 『パステル』の事だったんですか?」

「ぱ、ぱすてる?」

「はい、私たちの世界ではパステルって呼びます」

七夕がななばたで、花火がパステル? なんだかなあ。

世界が違ふとここまで言葉が違ふのか。

花火に見とれるリーシェの横顔に思わずドキッとする。

こうして、俺のアリシュレードで初めての祭りの夜は終わっていく
のだった。

第八話「怖い話」

それはある暑い夏の夜の出来事じゃった。

その日は夜だと言うのに30度を超える熱帯夜でな。

ある子供が好奇心で夜の学校に訪れおつてな、夜の学校の廊下は不気味なほど静かじゃった。

歩けばギシ、ギシと木の床が軋む音が響く。

その時じゃ。

「……あつい」

どこからとも無く声が聞こえてきたのじゃ。

その子供は声のする方向へと歩いていく。

「……あつい……あつい」

そして、ある部屋の前にたどり着いたのじゃ。

その子供はそーっと、扉を少しだけ開けて中を覗く。

すると、中は異様な熱気が立ち込めており、その中央に一人の男がおった。

そこからなにやら粘つくような音が聞こえてくる。

子供は気になりもう少しだけ扉を開く、すると。

「ガラッ」と思わず大きな音をたてしまったのじゃ！

中にいた男はその音に気づき、子供のほうを振り向くと！

「み〜た〜な!？」

奴の口の周りは赤く染まっておった！

そう！ 奴はキムチ鍋を食っておったのじゃよ！

「どうじゃ？ これがわしの怖い話じゃ」

そうして、一旦俺は部屋の電気をつける。

今のを話していたのはモンタ議長だ。

「す、凄い怖かったです」

「り、リーシェ、一応聞くけど、どこら辺が怖かった？」

「えっ？ だって王様、真夏の夜にキムチ鍋食ってるんですよ！？
しかも一人で！ 怖いじゃないですか！」

あゝ、なるほど。言われてみれば確かに怖いかも。

リーシェは肩を震わせながらまだ恐怖の余韻に浸っている。

「ゼロはどうだっ……おい」

俺のとなりに座っていたゼロは白目をむいて気絶していた。
お前、どれだけ怖かったんだ？

「ほっほっほ、わしの口もまだまだ衰えておらんのか」

「……さいですか」

俺たちは今、広間に丸テーブルを置いて周りを囲むように座っている。

テーブルの上にはろうそくが何本か置いてある。

「でも王様、これって結構いいアイディアですね」

「そ、そう？」

俺たちは今、互いに持つてる怖い話を言い合っている。
どうしてこうなったかと言うと。

- 今日是一段と暑い日だった。

リーシェと俺が暑いときはどうするのかと、他愛の無い話をしていて、俺の世界では

怖い話をして涼しくなる方法があるんだよ？ とか言っていると。

「じゃあ、ゼロやモンタ議長も呼んで今夜やってみませんか？」
と言うわけでこういうことになってしまった。

「じゃあ、次は……」

「あ、はい！ 私の番です」

「じゃあ、リーシェ」

そうして、再び電気を消す。

テーブルの上にあるろうそくに火を灯す。

ろうそくの明かりが不気味に俺たちの顔を映し出す。

「あれは、一昨日の事でした」

お、一昨日！？ めちゃくちゃ最近だね！？

「夜にどこからか何か物音がするので、私が廊下に出てみると」

「で、出てみると？ な、なんだい？？」

「そこには点々と血の跡がついていたんです」

「……なかなか怖くなってきたのう」

ん？ あれ？ もしかして……。

「私とその跡の先をたどると、洗面台までつづいてました。
そしてそこに何と！ べっとりと血のついたタオルが！」

……一応最後まで聞いておこう。

「そして、そのタオルを見つけた後に再び物音が！ そして私は
すかさず廊下にでてみると……なんとそこには、上半身に血がつ
いた

亡霊の後ろ姿が！ そして、その亡霊は何処かにスーッと消えて
いったのです！

これが、私の怖い話です」

そして、リーシェは部屋の明かりをつける。

「どうでした？」

「凄いスリリングな話じゃったわい」

隣のゼロはまたもや魂が抜けていた。

……おいおい。

「いかがでした？ 王様」

「あ、うん、凄い恐かった」

「本当ですか？」

「う、うん」

すまないリーシェ、その亡霊、実は俺だ。
本当の話はこうだ。

俺はその日、夜中に少しおながが空いたので何か食べるものを探しに台所へと

向かっていた。

眠たい目をこすりながら冷蔵庫を開けて、色々探していると、
トマトジュースが目に入ってそれを振って飲もうとする。

開けた瞬間、トマトジュースが噴射して俺の全身は真っ赤つかに。
たまらず洗面台に走ったために廊下に点々と跡が残ったのだらう。

その時拭いたタオルをリーシェが見たタオルだ。

そして、部屋に戻っていく俺の姿をリーシェが見ていたというわけだ。

勿論、この後パジャマを着替えた為、リーシェが知る由も無いわけだ。

「じゃあ、次は誰ですか？」

「えっと、ゼロは……無理か」

「となると、王様ですか？」

うーん参ったな。怖い話なんか無いぞ？

俺は必死に考える。

「王様、もしかして怖い話無いんですか？」

むっ、そういわれると何が何でも出したくなるな。

その時、ふとある出来事が頭をよぎる。

「おい、ゼロ起きろ。今から話するんだから」

「ん？ あっああ……ぼ、ほかあもういいよ」
「何言ってるんだ、最後だから聞いていけよ」

俺の話は怖いと言うよりも、フッフッフ。
俺は心の中で不敵な笑みを浮かべていた。
そうして、俺は電気を消す。

「さて、実は俺の話はごく最近の話なんだが……」
「ほうほう」

「王様、早く、早く」

「実は、俺は密かにアリシユレードのお菓子で有名な「ロッテ」と言う

菓子店に行った時があった」

「OH！ あの有名なロッテかい！？」

おっ、今回はゼロも話に乗れているようだな。

「私も行ったことがあります。あそこの苺マフィンっておいしいんですよね」

「ほっほっほ……そうじゃな」

「俺はそのロッテに早朝から並んである商品を買ったんだ」

「ある商品だった？」

「そう、その商品とは「スペシャル苺ロールケーキ」！」

その商品名を聞いた三人はさぞかし驚いていた。

ふっふっふ、それもその筈。なぜならそのロールケーキは一日5個限定と言う

超レア商品なのだからだ！！

「そ、それで買ったのかい！？」

「ふつ、城から3時間かかる距離を歩き、ロッテの前に並んだのは何と

早朝の3時だ……ロッテの開く時間は10時。俺は当然の如く買えたのさ」

「そ、それは、よ、良かったですな王様！」

「だが、ここからが問題なんだ」

「どうしてだい？ 魔王君」

「なぜなら、俺はそのロールケーキが食べられなかったからさ！」

広間に衝撃が走る。

外では突然雨が降り出す。

「ど、どうしてなんじゃ？」

「俺は買った後誰にも分からないように冷蔵庫の最奥に入れて、更にダミーの商品を前に置いて完璧にガードしていた……にも関わらず、

俺が食べようとした時には既に消えていたのさ」

「そ、それは多分、幽霊さんが食べたに違いないですね！」

まあ、突っ込みたい所だがここは抑えよう。

「俺の怖い話はここからなんだ」

「えっ？」

「実は……この中に犯人がいるって事だ！」

突然、外で雷鳴が轟く。

皆が俺の方を向く。

「そ、それは本当なのかい金田……じゃない、魔王君!？」

「ああ。俺の推理が正しければ間違いない」

「だ、だれなのじゃ!？」

「ゆ、幽霊さんですよ! 幽霊さん!」

むう、犯人はいまだシラを切る気ですか……なら。

「リーシェ、リーシェ」

「なっ、なんですか? 王様?」

「口のところに食べかすが」

「な! なにを言ってるんですか王様! 騙されませんよ! 大体、あれは1週間も前……あっ!」

フッフッフ、俺は密かに買いに行ったと言った筈。それを知っている者こそ犯人!

明らかにバレバレだったが、ついに正体を出したな!

この、苺好きのリーシェさん!

「ち、ちがうんです王様! 本当はちょっとだけで済ませようとしたんですけど、

こっ……おいしくて……その」

慌てて言い訳を述べるリーシェ。

むう、本来なら可愛くて許すところだけど……物が物だけにもう少しからかってみる。

「ほほお、あんなに苦労して買ってきたのに、全部! 丸ごと! 食べたわけなんだ」

「あ……あう」

「そんなんだから、リーシェ太るんだよ……なぐんてね」

瞬間。場の空気が凍りつく。……あれ？何で？
ゼロとモンタ議長は口をパクパクさせている。

「……んふふふ」

「り……リーシェ？」

「ええ、そうです、私がロールケーキを食べました」

はつきりと断言するリーシェ。おや？ 以前にも感じた寒気が。
その時、窓の外で恐ろしいほど大きな雷が！
暗い室内を雷が一瞬明るくする。

その時、俺が見たものは。

ギャー！ リーシェの影に角が生えてる！ 生えてますよ！？

俺は即座に、自分の命の危機を悟った。

「そうですよね、私も分かっていたんですよ？ このままじゃあ太るの……」

「ごめん、許して、僕が悪かったです。言葉のアヤです」

「王様？ どうしたんですか？ 私は怒って無いDEATHよ？」

怒ってる！ 絶対怒ってる！

無意味に文字変えてる所あるし！

「そつえば知ってますか王様？」

「な、何を？」

「嘘を暴かれた犯人は、力の限り抵抗するって……」

リーシェは俺の方を見て指を鳴らす。

それ抵抗言わない！ 暴力だから！ もしくは逆切れ！

リーシェのその姿を見るや否やそそくさと退散するゼロとモンタ議

長。

「「じゃあ、後は二人で仲良くしてね」……お休み」

なんて言っただけで帰っていった。

「王様、たーっぷりと抵抗させていただきましたね？」

「イヤー……」

そうして、しばらくの間俺の叫びが城中に響く。

ああ……すごく怖い話でしょ？

第九話「秋といえば？」

俺がアリシュレードに来てから六ヶ月が経ち、俺の世界では10月に。

ああ、そういえば秋の季節だな。

木の葉が色鮮やかに色づき、肌寒い風が秋を感じさせる。

このアリシュレードにも同じように秋は存在していた。

秋といえば色んな美味しいものの季節。

俺は期待に胸を膨らませていた……が。

「では王様、問い10の答えをどうぞ」

「……さ、三番？」

「ブッブー！ 正解は一番です。……はあ、これじゃあ何時晩御飯食べれるか

分かりませんね」

リーシエはハアと、ため息をつく。

「うっ……腹減った……」

俺は今リーシエと共に城の図書館にいた。

アリシュレードにも秋といったら、『食欲の秋』のようなものがある。

それが『勉強の秋』……！！

リーシエに無理やり図書館に連れて来られて、問題が解けるまで晩飯抜きという

鬼コーチぶり。

か、勘弁して、俺、向こうでも成績悪かったのに。

「さあ！　どんどんいきますよ！」

俺の目の前の机に教科書のタワーができていく。
いかん……眠くなってきた。自己防衛本能が。

眠くなりそうな俺にすかさず持っていたペンを投げつけるリーシェ。

「イタッー！」

「王様、そんなことでどうするんですか！　王様は
一番この世界で偉いんですよ？」

「うつつ、できれば何か簡単なものにしてほしいんだけど」

「……ハア、王様何か得意分野とがありますか？」

「うーん、歴史かな？」

「歴史……ですか」

リーシェは教科書のタワーを調べていく。

そして、一冊の本をとりだした。

「じゃあ、王様に関係する歴史で」

「俺に？」

「はい、題して「今までの魔王様ってどんな人達？」です」

「魔王……」

そっいえば前にそういう本を図書館で見たような気がする。

「さて、王様の前に数々の魔王様が居りましたが、一番凄い魔王様は

やはり、「ルシフェル様」ですね」

「どんな奴なの？」

「私も見たことがありませんよ、だって、ルシフェル様は今から
3万年前にこの「アリシユレード」を作った方で、その後すぐに

亡くなつたそうですから……」

「3万年……」

地球の歴史に比べればまだまだ浅いんだな、アリシユレードって。

「ルシフェル様は唯一純粋な魔族なのですよ？」

「えっ？ リーシェたちは？」

「私たちはアリシユレードが作られてから生まれた者達ですから、純粋とはいきませんよ」

「じゃあ、ルシフェルって何処から来たのとか分からないの？」

「はい」

うーん、気になるけど調べようが無いな。

ルシフェルって、一体どんな奴なんだ？

「そして、ルシフェル様の後を受け継いだのが『ベルゼルフ様』

ベルゼルフ様は、アリシユレードで生まれた魔族を一つにまとめた

偉大な方なんですよ？」

「あんまり凄そうには見えないけど？」

「何を言ってるんですか、1億もの魔族を束ねたのはベルゼルフ様だからこそ

ですよ？ これにより、魔族同士での争いは終つたのです」

「へっ」

「そして、最後に4代魔王『バリス様』この方は人間と魔族との調和を

目指したお方です」

偉い！ 話分かる魔王もいるもんだ。

俺が今聞いた中で一番偉い魔王じゃないか。

「この方は人間と魔族が一緒に暮らせる様に様々な規制、罰などを書き記し、ついに人間と魔族の調停にまで持ち込みました」

「おお!! ……あれ? でも、今いがみあつてるよね?」

「……はい。実はこの調停の最後に人間側から不意打ちを受けて調停は決裂。」

そして、バリス様もその時の傷が原因でお亡くなりになったと言われています」

「そっか、だから人間を今も憎んでるんだ」

「……はい」

……結構深刻だった。

てつきり、魔族が人間のところに勝手に攻め込んできてひんしゅく買って

仲が悪いとかそういうものと決め付けていた。

「あつ、でも王様を憎んでるわけじゃないんですよ?」

「……うん、ありがとうリーシェ」

「い、いえ……」

俺は椅子に思いっきりもたれかかり、天井を見上げる。

そして、今までしてきた事を振り返ってみる。

そう、俺は魔王としてこんなにがんばって……無いな。うん。

歴代魔王の話聞いてると、なんて小さい自分が居る事が。

「よし!」

自分の顔を一回叩いて気合を入れる。

そして、目の前の教科書に目を通し始める。

「王様?」

「リーシェ、問題出してくれ。俺もそんな魔王になれるようにがんばる！」

「……はい！」

俺達はまた、勉強を再開させる。

そうだ、俺も魔王になったんだから何か立派な事をやってみせる。そう、心に決めた。……しかし。

気合をいれたからと言って、頭が良くなるわけではない。この後も延々とリーシェの勉強会が終わる事は無かった。

「王様！ まだ解けないんですか!？」

「ぬおおおおお……」

いかん……また自己防衛本能（眠気）が……。

「王様、次はナイフがいいですか？ 包丁がいいですか？」

「えっと……それって、投げるんだよね？」

「勿論です」

も、もう勉強は勘弁して……。

第十話「今日は何の日？」

「王様！ 準備はいいですか！？」

「……えっ？」

突然俺が台所で飯を一人寂しく作っていると、何やら甲冑に身を包んだリーシェが現れた。

「……まあ、食べる準備はできてるけど」

「違いますよ王様！ そんなのどうでもいいですから、広間に来てください！」

「あつ！ り、リーシェ痛い！」

有無を言わずリーシェは俺の袖を引っ張る。

俺の飯がどうでもいいとは酷い……。

広間に連れて来られると、王座に座らされる。

そして、リーシェが目の前で腕を組んで俺を睨む。

「王様、今日は何の日ですか？」

「えっ？ や、休み？」

「それもあります」

「じゃあ、やつぱり勉強？」

「何を言ってるんですか、今日は『勇者の日』ですよ！」

「……はい？」

俺は一瞬思考が止まってしまった。

勇者……？ いやいや、そんなの知らない。

「リーシェ、勇者の曰って何？」

「えっ！？ 知らないんですか！？」
「いや、初耳だけど……」

リーシェは一回ため息をつく、腕を背中に組んで広間を歩き出した。

「いいですか王様、この日になると魔王を倒しに勇者が来るんです」
「えっ？ なんで今日だけ？」
「それはやっぱり暇だからじゃないでしょうか？」

とんでもない理由だ。

暇だから殺しに行くか！ なんて理由あっていいのか！？

「だから、こうして私と魔王城のしもべが王様を守るために戦う準備をしてるんです！」

あー…… だから今日の飯当番居なかった訳ね。

その時、突然電話の音のような物が広間に響く。
天井のモニターが俺達の前に下りてくる。
そして、一匹の猫の姿をした使い魔の姿が映し出される。

「どうしたの！？ ニコル曹長！」

「リーシェ隊長、現在屋敷上空に正体不明の物体が近づいてきます
ニヤ」

「正面モニター出せる？」

うわ、なんかドキドキしてきた。

こう、緊迫感が伝わってくる。

しかし、何時こんな訓練してたんだ？ リーシェ達は？

そして別のモニターが出てくる。
モニターの画面には何やらへりのようなものが近づいてきているのが分かる。

「あつ！ あれは」

「どうした？ リーシェ？」

「いえ、あれはゼロの私用へりですね」

「えっ？ ゼロ？」

むむむ……セキュリティを強化しても屋敷に潜入してくる理由はコレか。

確かに空から来るのは盲点だったな。

「ゼロなら別に構いませんね……」

ほっとするリーシェ。

しかし、このままあつさり来られるのも……そうだ！

「リーシェ、あれはゼロじゃない……！」

「えっ！？ ど、どうしてですか？」

「考えてみてくれリーシェ、普通に入り口から入ってくればいいのに、なんでわざわざへりを使う必要があるんだ？」

「！ な、なるほど！ さすがです王様！」

「ああ、だからあれはゼロと偽った勇者なんだ！」

無論、そんな訳は絶対無い。

ゼロは何時も自分をアピールしたいはずだからこっそり潜入して俺達をビックリするような登場がしたいはず。

リーシェは猫の使い魔に命令をする。

「ニコル、屋敷上空のヘリに向けてこれより地对空魔法を発射。そして、

第1小隊から第3小隊が屋根裏で待機。もし、パイロットが生存していた

場合、捕獲。抵抗すれば抹殺も許可します」

「了解ですにや！」

……まずい、面白くなってきた。

さて、ゼロの奴どうするんだろ？

複雑な気持ちでゼロの乗っているヘリが映っているモニターを見る。

『第一小隊から第三小隊、配置つきました』

「よし！ ニコル曹長！ 全砲門発射！」

「ラジャー、あつ、ぽちつとにや」

リーシェの命令の後、屋敷の周りから凄まじい轟音が鳴り響く。

モニターを見てみると、ヘリに向けて隙間の無い光が襲い掛かる。

……あれは死んだな。

俺はモニターに向かって合掌した。南無。

しかし、ヘリから飛び降りて屋根に着陸する影が確認される。

「第一小隊は屋根の後方、第二、第三小隊は前方から挟み撃ち！」

『了解！』

リーシェの指示でゼロを包囲する。なんと修練された動き。

そして、ゼロはあっさり確保された。

『こ、これは何のドッキリだい！？ ぼ、ぼかあは死ぬところだったんだよ！？』

モニター越しにガタガタ震えているゼロが見て取れる。
うーん……ちょっとやり過ぎたか。

『リーシェ隊長、誰かが屋敷に近づいてきますにゃ！』
「モニター出して！」

すると、そこにはモンタ議長の姿があった。
なにやら紙包みを持ってこっちに向かっている。

「あつ、あれつて『ロッテ』の莓マフィンじゃないですか！」

リーシェが嬉しそうな顔をする。

モンタ議長もなかなか気が利いてますね。

すると、モニターからモンタ議長の声が聞こえてくる。

『ほっほっほ、リーシェの奴は莓マフィンが好きと言っておったかな。
らな。』

これは密かにワシら男だけで食べるとするか。リーシェの奴は
最近、本当に太ってきておるみたいじゃからのう。ホッホッホ

おやおや、誰も居ないからと言って独り言が大きいモンタ議長。

口は災いの元と言いますよ？

そして、その災いは隣のお方からモンタ議長に対して降り注ぐでし
よう……！

「全軍、正面玄関から入ってくる勇者を攻撃……」

「えっ？ でもリーシェ、あれはモンタ……」

「あれは勇者ですよ。王様？」

「は、はい！ おっしゃる通りです！」

まあ、リーシェに対して、あんな発言できた時点で勇者であろう。しかし、当の本人は知らないのである。

「後、勇者の持つてる紙包みは必ず確保。危ないかも知れないから私のところまで持ってきて！ 絶対よ！」

「……………」

そして、モンタ議長が正面玄関に到着した瞬間。

四方八方からリーシェの特殊部隊がモンタ議長を拘束する。

『な、なんじゃこれはー！？ な、何をするか！ ああ！？

わ、わしの苺マフィンがー！』

問答無用で苺マフィンを奪われるモンタ議長。

そして、追い返される勇者ことモンタ議長。

「ねえ、リーシェ」

「はえ？ にやんですか？」

「ま、まあ取りあえず口の中のマフィン食べて」

「んぐ…………。はい？ なんですか王様？」

「…………勇者こないね？」

「…………そ、そうですね」

ゼロとモンタ議長がこっぴどくやられて3時間ほど経過した。しかし、問題の勇者が全く現れない。

「ど、どうしたんでしょうね？」

「んー……もしかして、もしかするとだよ？」

「はい、なんですか王様？」

「勇者も暇じゃなくなったとか？」

「……ま、まさか」

すると、一人の猫の姿をした使い魔が一通の手紙を持ってやってくる。

「リーシェ隊長、お手紙です」

「送り主は……勇者！？」

「えっ？ どれどれ？」

そうして、俺達は手紙の封を開けると。

『こんにちは憎き魔王、今日はそっちに行く予定だったけど、友人の結婚式のスピーチを頼まれました。

結構悩んだんだけど、結婚式の方に行くことにしました。

だから今日は行きません。また後日伺うことにします。

では。

勇者より』

……俺を退治するのと、友人の結婚式が同じレベルな訳ね。
この文からして、この人俺を憎んでないよね？

「お、王様どうでしょう？」

「まあ、これないんだから仕方ないよ」

「はあ……」

「どうしたの？」

「いえ、何か一気に力が抜けてしまって……」

でも良かった。やっぱり、闘わないのが一番だよ。
そう思いながら、俺はゼロやモンタ議長の心配をしていたのだった。
あれは……結構トラウマになるよな。うん。

第十一話「聖夜の真実（前編）」

最近、アリシユレードで異変が起きている。

ビルの開発、ダムの建設など色んな事業が進んでいる。

俺が来た当初は街は露店などが多かったが、今や店舗をどっしりと構える

店が多くなってきていた。

大が小を潰す。

以前のアリシユレードならこんな事は無かった。

皆何かに取り付かれたかのように仕事をするようになっていた。

そんなアリシユレードに俺は不安を感じていた……。

そして、その不安はこの日に的中した。

「王様〴〵そっち持っててください〴〵」

「えっと、これでいい？」

「はい、OKです」

俺達は広間の飾りつけに追われていた。

いくつもの丸テーブルを置き、その上に豪華な食事を用意する。
壁にはキラキラと光る紐ひもを飾っていく。

今日はリーシェが言うにはパーティがあるらしいが……。

「なあ、リーシェ」

「はい？　なんですか？」

「今日は誰かの誕生日か何か？」

「いえ、ちがいますよ」

「？　じゃあ何？」

「今日は『クリスマス』なんです」

「えっ!!?」

「どうかしました? 王様?」

「ほ、本当にクリスマスなの?」

「はい、そうですけど?」

今まで似ているものはあつたけれど、同じなのは一度も無かった。
こっちでのクリスマスってどういう意味なんだろう?

「なあ、リーシェ」

「はい?」

「ちなみに、クリスマスってどんな意味?」

「えつとですね、この日にイエス・キリストが誕生してそれを
祝う祭りと聞いてますね」

「えっ?」

「? 王様?」

嘘だろ? 今回に限ってなんで意味まで一緒なんだ?

この世界にイエス・キリストが存在したのか?

それとも同姓同名が居た?

「王様! 早く手伝ってください! 間に合いませんよ?」

「えっ? あっ、ああ!」

それから余りの忙しさに考える暇が無かった。

そして、夜になり、沢山の魔族たちが城に集まる。

マイクを取って司会進行をするリーシェ。

『それではごゆっくりとパーティのほうをお楽しみください』

リーシェの一言で会場は大いに盛り上がる。

それを俺は王座に座って眺めていた。

「王様、どうですか？ このドレス」

「うん、似合ってるよ」

リーシェは赤いドレスを身に纏い、俺の前で一回転する。
ドレスが花卉のように舞う。

「あつ、王様これ……どうぞ！」

リーシェは突然後ろから両手の平ぐらいの箱を俺に渡してきた。
ラメが混じったピンク色のリボンが赤い箱を包んでいた。
これはもしか、クリスマスプレゼント？

「開けてみて良い？」

「はい」

俺は綺麗に包装された箱を開けると、そこにはピンク色の手袋が出てきた。

「これってもしかして、手作り？」

「は、はい。王様の手に合うかどうかかわかんないですけど」

俺はすぐに付けてみると、ありゃ？ ブカブカだ。

以前は俺が寝るときにサイズ測ったのに今回はしてないみたいだ。
側ではリーシェが俺の返事を今か今かと待っていた。

「うん、ぴったりだよ」

「ほ、本当ですか？」

「ありがとうリーシェ、大切にするよ」
「は、はい！」

そうなると、俺もお返ししたいけど。
参ったな、今日がクリスマスと分かっていたのならプレゼントを
用意してたんだけど何も無い。

「ごめん、リーシェ。今はプレゼント無いけど明日お返しするよ」
「い、いえ！ 私は大丈夫です」
「もし、何か欲しいものがあつたら言つてよ」
「欲しい…… ものですか？」
「うん、何でもいいよ？」
「その…… です」

リーシェがその言葉を聞いて、何やら小声で何か言っている。

「うん？ 何リーシェ？」
「……す」
「えっ？ 何？」
「や、やっぱりいいです……！」
「あっ！ リーシェ……！」

顔を真っ赤にしてどこかに走っていった。
なんだったんだろ？
それとすれ違いにゼロが俺のほうに近寄ってきた。

「やあ、魔王君。さっきリーシェが顔を真っ赤にしてどこか行つて
ただど？
どうしたんだい？」
「いや、俺にもさっぱり」

「ふーん……」

「そういえば、ゼロ」

「なんだい？ 魔王君」

「最近、ビルの開発とか進んでるけどどうかしたのか？」

その事を聞くと、ゼロの表情が曇る。

なんだ？ こんなシリアスなキャラだったか？

「それがね、僕にも分からないんだ」

「はあ！？ 分からない！？」

「ああ。僕はあんなに意味のない建設は断固として反対したい。

だけど、僕の親と会社員は何かに取り付かれたように建設を続ける」

「でも、お前が反対したら……」

「そう、そこなんだよ魔王君」

「？」

「僕も始めは反対するんだが、いつの間にか建設を進めるようになってる」

「ど、どういう事だ？」

「だから僕も分からないんだよ、やりたくないのに、やりたくなってる？」

「そんな感じだ」

ゼロは長いため息をつく。

その顔は何処と無く元気が無い。
よほどこたえているみたいだな。

「じゃあ、魔王君、また来るよ」

「あ、ああ」

ゼロは会場のほうへと戻っていく。

その後、俺も会場へ向かい、他の魔族と会話する。
しばらくして、会場の熱気をさけるかのように外へと出る。
外は鳥肌が立つほど寒かった。

「ううゝ、やっぱり中に居たほうが……あれ？」

向こうの方で誰か居る。

俺が近づいてみると……。

そこには、闇に映える金色の髪をした子供が立っていた。

「こんばんは、お兄ちゃん」

「ウイル」

いつものように俺にひまわりのような明るい笑顔を俺に見せる。

「あつ、でも今日はお兄ちゃんの世界ではメリークリスマス……だった？」

「えっ？ あつ、ああ」

「じゃあ、メリクリ！ メリークリスマス！ お兄ちゃん」

ワイイと無邪気にはしゃぐウイル。

俺の周りをグルグルと回る金髪の妖精さん。

「ウイル、その格好で寒くないのか？」

「えっ？」

今も水色パジャマで居るウイル。

俺でもこんな寒空の中パジャマで居たら死んでしまう。

「ほら、これでも着てろ」
「あつ……うん」

俺は上に羽織っていたマントをウィルに渡す。
まあ、大して変わらないと思うけど、それでも無いよりはマシだろう。

「ウィル、ここは寒い。中に入ろう」

「あつ、待って、お兄ちゃん」

「? どうした?」

「お兄ちゃん、今この世界はどう?」

「どうって、何が?」

俺はウィルの言った意味が分からなかった。
俺の言葉にウィルは頬を膨らませる。

「最近、お兄ちゃんの世界に似てきたでしょ?」

「そういわれてみれば……」

「お兄ちゃん前に言ってたでしょ?」

「えっ?」

「お兄ちゃんはこの世界の人間じゃないから帰るって」

「あー、そういえば」

「だからね、お兄ちゃんの世界に似てきたら帰らないんじゃないかなって。」

「どう? お兄ちゃんこっちの世界に居てくれるようになった?」

ウィルは期待に満ちた目で俺の方を見る。

だけど、俺の答えは既に決まっている。

「駄目だよ、ウィル。前に言ったように俺は帰らないといけない」

その言葉でウィルの顔が曇る。
そして、ウィルはうつむいてしまう。

「なんで、なんでなのお兄ちゃん？」

「ゴメンな、ウィル」

「こんなに……こんなに兄ちゃんの世界とソックリにしたって言うのに」

「？ う、ウィル？」

ウィルが顔を上げた時、そこには以前のようなひまわりの笑顔は無かった。

その代わり、親の仇を見るような目と、冷徹な笑みがそこにあった。

「そっか、ソックリじゃだめなんだ」

「おい、ウィル？」

「お兄ちゃん、僕、決めた。この世界壊すよ」

「なっ！？」

「兄ちゃんのいないこの世界なんかあっても無くても一緒だもん」

冗談だろ？ と、ウィルに俺は尋ねたかったが、ウィルの目を見てそんな事とはとても言えなかった。

この眼は明らかに本気だ。

ウィルはふらふらと周辺を歩き出した。

「お兄ちゃんは、僕にそんな事出来ないと思ってるでしょ？」

「……ああ」

「残念でした。出来ちゃうんだ、コレが」

俺とある程度距離を離れたウィルは俺の方に振り返る。
そして、ある事実を俺に話した。

「僕の名前はウィル。『ウィル』アリシユレード。僕はこの世界そのものなんだ」

「なっ……………なんだってー！！！！？」

第十二話「聖夜の真実（後編）」

「ウィ、ウィル＝アリシユレード？」

「そう、僕はこの世界そのものなんだ」

クリスマスの夜にウィルからとんでもないプレゼントを貰った。

それは、ウィルがこの世界だという衝撃の事実。

「な、なんで？」

「それはね、魔王ルシフェル様が僕を作り上げたからさ」

確かに、ルシフェルはアリシユレードを作ったと言われているけど

……

まさか、こんな子供の事だったのか。

「ルシフェル様は自分の住んでいた世界が戦いによって滅び、最後の力で

僕を作り上げた……そして、この世界は僕の魔力で作られている想像。

いわば、空想の世界」

「な！？　じゃありーシエ達も空想の人だっていうのか！？」

「安心して。この世界で生きている人たちは既に僕の想像では無いから」

「どういう事だ？」

「確かに、3万年前に生まれた魔族と人間は僕の想像で生まれたけど

その中で生まれた子共達は既に違う。僕の想像で生まれたわけじゃない」

3万年前？　じゃあ、ウィルはあの姿で3万年も生きているのか！？

「ルシフェル様は自分の世界が戦いによって滅びたため、僕を『調整者』に指名した」

「調整者？」

「そう、世界のバランスを影で操作する。それが調整者。」

そして、僕にそれを行う為にある2つの力を授けてくれたのさ」

「2つの……力？」

「一つは、お兄ちゃんのつけてるそのリング」

俺はウィルに言われてハッと気づく。

たしか、これは魔王になったらつけるってリーシェが言ってたな。

「そのリングをつけてる者の記憶、望みが僕には見えるようになって
いるのさ」

「！？」

お、俺の恥ずかしい過去もバレてるって事？

「そして、もう一つ」

「な、何？」

「このアリシユレードの世界で生まれた者は全て僕の手によって
記憶を操作できるって事」

「にや、にやんだってー！？」

い、いかん。

あまりの驚きに言葉がおかしくなってる。

「！　そうか、今までのビル開発とか七夕、花火とかはまさか」
「そう。お兄ちゃんの世界の記憶から生まれたものだよ？　この
アリシユレードにそんな行事とか物は無いもの」

なるほど、以前、リーシェに祭りの事を聞いた時は
「祭り」というものは知っていたけど「何の祭り」かは知らなかった
ウィルに祭りというものがなんなのかだけインプットされたからだ
ろう。

「でも何で言葉がここまで違ったんだ？」

「えっ？　だって、名前変えたほうが面白いし、でも今回は
お兄ちゃんの世界にソックリにする為に同じ名前使ったんだよ？」

なるほど……。

今までの疑問、問題が全て解けていく。

「……でもね」

「？」

ウィルの顔が少し暗くなる。

どこか、寂しそうに感じるものがあつた。

「ルシフェル様は僕に一つだけ命令したんだ」

「命令？」

「うん。それは『お前はアリシユレードの者と関わる事を禁じる。』

そして、魔王の願い、望みを叶える義務をつける』と言つもの」

「！？」

「ルシフェル様は調整者は常に中立という意味で僕にこういう
命令を下したんだと思う。でもね、でもね」

ウィルは目から頬を伝う涙を袖で拭う。

そうか、ウィルの言ってた意味がやっと分かった。

ウィルは俺が来るまで誰とも会う事も出来ず、話すことも出来ず遊ぶ事もできなかった。

一人で3万年も生き続けたわけか。

ルシフェルの命令は『アリシユレードの者と関わる事を禁じる』
そして、俺はアリシユレードの者では無い。

ウィルにとって、俺は最初で最後の友達と言うわけか……。

「ウィル、一つ聞いていいか？」

「何？」

「4代魔王の「バリス」は人間と魔族の和平を望んでいた筈。
これは調整者としては一番望ましい事じゃないのか？」

そうだ。一番気になる事だ。

もし、ウィルの言ってたことが本当ならば、
戦争を起こさないようにするにはそれが一番じゃないか。

「アイツは、そんな偉い奴じゃないよ」

「えっ？」

「アイツは周りから言われてただ和平の為に動いただけ。
心の中では人間と戦いたい、殺したいと願っていた」

「じゃあ」

「……うん。だから、願いを叶えてあげた」

「ウィル……」

ウィルはその話をしている間、何処と無く元気が無かった。
ウィルにとっても辛い事だったんだろう。

「お兄ちゃん、そろそろ話も終りにしよう」

「えっ？」

「僕はお兄ちゃんがここにとどまらないと言ったのなら、僕はこの世界を壊す。」

もし、お兄ちゃんが留まるというなら僕はこの世界を残す。

さあ、どうする？」

「ウィル！」

「期限は12月31日。お兄ちゃんの世界で言う年の終りまでに決めておいて。その時、またこの場所だね」

そういつて、闇の向こうにウィルは姿を消していった。

「ウィル……」

俺は……どうすればいいんだろうか。

突然の真実にただ立ちすくむしか無かった。

第十三話「解放」

あれ以来、ウィルとは出会わなかった。

ウィルは本当に大晦日の日まで姿を現さないのだろう。

俺に与えられた選択肢は二つ。

俺が残ってこの世界を救うか。

俺が帰ってこの世界は消えるか。

微かに、もしかしたらウィルはそんな事しないのではと期待を抱いてしまう。

だが、もし本当なら取り返しのつかないことになる。

なにより、あの時の目と笑みを思い出せばそんな期待も消えていく。大局で事を見ればどちらを選ぶべきかは火を見るより明らか。

それでウィルもこの世界も万々歳。

しかし、向こうの世界で俺を待っている両親や友達はどうなる？

きっと今も心配しているに……うーん、心配してるか？

いや、きつとしてるに違いない！

もしかしたら、ほのかに俺に恋心を抱いている女性も居るはず！

そして、俺がいない事に今も悲しがつているはずだ！

よーしいいぞ、俺の都合の良い思考回路。

こうでも思わないと自分が挫けそうだ！

「王様？ 何一人でブツブツ言ってるんですか？」

「うわぁ！？ り、リーシェ何時の間に？」

「さっきからいますけど？」

「き、聞こえてた？」

「いえ、何を言ってるのかはわかりませんでしたけど」

その言葉を聞いてほっと胸を撫で下ろす。

リーシェは俺の仕草に不思議そうに首をかしげていた。

今日は12月30日。

ウィルの言っていた日まで後1日。

時間が無いというのにもかかわらず、まだなんにも決めていなかった。

人生最大にして最悪の選択に俺の頭はオーバーヒート寸前。

「王様、顔が青ざめていますけど？」

「あつ、気にしないで。大丈夫だから」

「何言ってるんですか、王様の体調が悪いのに気にしない訳無いじゃないですか！」

リーシェは俺の方をまじまじと見つめる。

その表情は真剣そのものだ。

これほど心配してくれる人が隣にいる事は大変嬉しい事だ。
リーシェの心配に俺の心も多少安らぐ。

「だって、今日は庭掃除、廊下磨きの当番は王様なんですよ？」

……そっちの心配か。

俺は掃除道具一式を持って渋々廊下に出る事にした。

まあ、体を動かせば何かいい考えでも思いつくだろう。

- - 3時間後。

全く思いつかなかった。

結果、鏡のように光る廊下と落ち葉一つ落ちていない庭が出来ただけだ。

結局時間を浪費するだけになってしまった。

まあ、喜んでいる方が一名存在しますがね。

「さすが王様ですね！ プロ並みじゃないですか」

そんな事言われてもあんまり嬉しくないやい。

しかし、喜んでいる顔を見ると掃除をした甲斐があったものだ。

……ハッ！ 一瞬この世界に居ても良いかな～などと思ってしまうた。

俺は王座に再び座って考える。

結局3時間前と同じだ。

ウィルもこの世界も救う方法は無いものだろうか？

「王様、どうぞ」

リーシェは金の装飾が施されたティーカップを盆に乗せて持ってきてくれた。

ティーカップには澄んだ紅い色の紅茶が入っていた。

気持ちを落ち着かせる良い香りが辺りに漂う。

俺はそれをありがたく受け取る。

「なあ、リーシェ」

「はい？ 何ですか？」

「もし、もしもの話なんだけど、世界を取るか恋人を取るか尋ねられたらどうする？」

「えっ……」

俺の言葉にリーシェは何故か俺の顔を見つめる。
ん？ 確かに変な質問だと我ながら思ったが、これは
大事な事なんだよ、リーシェ。

「そ、そうですね私なら」

「私なら？」

「……ど、どっちも選びます！」

いや、それは無理なんだけど。

リーシェの顔がほのかに赤く染まっていた。

「リーシェ、それは無理なんだよ」

「だ、大丈夫です！ 何とかできるんです」

うん、そうだ！ できるんだ！

などと何回も自分に言い聞かせるリーシェ。

「王様はどうするんですか？」

「えっ？」

「私と世界どっちを取るかって言われたらどっち取りますか？」

思いもよらないリーシェの反撃。

今そういう類で俺は迷っているのにリーシェが知る由もない。
こういう場合、やはり世界なのだろうか？

しかし、ここで世界と言ったら俺の無残な屍が出来かねない。

「でも、王様の事ですからやっぱり両方ですよね？」

「えっ？」

「だって、魔王様なんですよ？ 欲張りじゃないと」

魔王だから欲張りなんていうのは通用するのか？

俺は笑い飛ばそうとした時。

あれ？ でも待てよ？

何かが思いつきそうだ。

俺は必死に記憶を手繰り寄せる。

すると、一つの可能性が思いついた。

「そうか」

「？ 王様」

「うん、いけるかもしれない」

「オーイ、王様？」

「ありがとう！ リーシェ」

「えっ？」

「もしかしたら上手くいくかもしれない！」

リーシェは訳がわからないといった様子。

だが、それでいい。

明日にはその結果が分かるのだから。

- - 早朝4時。

12月31日になった。

いまだ陽が昇らぬ暗い外へと足を運ぶ。

ウィルはアリシユレードの人がいれば姿を現すことができない。

俺一人でなければならぬ。

外に出ると、肌に刺すような寒さが俺に襲い掛かる。

吐く息は白く、指は思うように動かない。

「ウィル！ 出てきてくれ！」

日が経ったとはいえ、外は真つ暗闇。

俺はまだ月日が経ったとは見なされてないのか些か不安に駆られた。だが、そんな不安もすぐに消えることになる。

微かに暗闇から歩く音が聞こえてくる。

ゆっくりと俺のほうに近づいてくる。

そして、天使とも悪魔ともとれる子供は現れた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「ウィル」

「意外と早かったね？ てっきり夜まで待たされるかと思ってたんだけどな」

ニコニコと笑いながら俺に話しかけるウィル。
早く決まったのが嬉しいのだろうか？

「まあ、結論は聞くまでも無いかも」

「なんでだ？」

「だって、お兄ちゃんの性格考えたらこの世界を放ってけるわけないもの」

成る程。

だが、俺の答えはその期待にご期待できない。

「ウィル、すまない」

にこやかな顔が一転、不機嫌そうな一文字口になる。
俺の方をジト目で見つめる。

「お兄ちゃん、冗談はやめてよ？」

「ウィル、冗談なんかじゃないんだ」

ウィルは俺の言葉を聞いて目を丸くする。

その声からは一抹の迷いも無い事が分かったからだろう。
途端、ウィルは泣き出した。

「なんで！　なんでだよお兄ちゃん！」

「ウィル、お前はそんな脅しをするような子じゃないだろ？
もっと素直で元気だったじゃないか」

「それはお兄ちゃんがいるからだよ！」

大粒の涙がウィルの頬を伝う。

気持ちとは分からなくも無い。

3万年も一人ぼっちになれば気が狂ってもおかしくない。

だからと言って、俺がここにいれば大丈夫と言うわけでもない。

俺には寿命が有るし、帰る場所もある。

ウィルは俺のほうをキツと睨みつけた後行動にでた。

「いいよ、お兄ちゃんがそういうなら前に言ってた事を
行動に移すもん！」

「ウィルどうする気だ？」

「簡単だよ、この世界の山全部噴火でもさせれば一瞬だよ
半日もあれば消えるんじゃないかな？」

ウィルの体から光が溢れる。

瞬間、地鳴りが鳴り響く。

「ウィル！　よせ！」

「もう遅いよ、やるといったらやるんだから」

べーっと舌を出すウィル。

これ以上は子供でも容赦は出来ない。

俺は考えを実行にうつす事にした。

「ウィル！ コレを見る」

「？」

俺は右腕に付けられている魔王の証といわれるリングを見せる。
もし、俺が本当に魔王になっているのであれば！

「それがどうしたの？」

「俺は魔王！ 魔王「鈴木 修」だ！

魔王の名において命ずる、いますぐその行いをやめるんだ！」

魔王の命令は絶対服従。

かつて、魔王ルシフェルの言う事を3万年も守り通したウィル。
同じ魔王として見られているのであれば可能の筈だが！？

その時、地鳴りが一段と大きくなった。

やはり……だめか？

「……あれ？」

それはウィルから発せられた声だった。

えい！ と掛け声が響くが何も起こらない。

ウィル自身何が起こっているのかわかっていないようだ。

俺は作戦が成功した事に思わずガッツポーズをした。

「ウィル」

「お、お兄ちゃん？ い、いやその」

ウィルは後ろにたじろぐ。

俺はずんずんとウィルのほうに近づいていく。

気迫に押されてか、ウィルはこけてしまう。

怯えるウサギのようにその場でウィルは震えている。

自分でもとんでもない事をしたのは承知しているのだろう。

そして、それ相応の罰が待っていることも。

「ウィル、魔王の名において命ずる」

「ひっ！」

俺はウィルに向かって手の平を向ける。

「今、この時より、『アリシユレードの者と関わる事を許す

そして、調整者としての任を解くことにする』」

「……えっ？」

キョトンとした表情で俺の顔を見る。

そして、俺の言った意味が分かったのか、依然と変わらぬ

笑顔を見せてくれた。

俺はウィルの手を引っ張ってを起こすと、そのまま抱きしめる。

「よく、長い間がんばったな。辛かっただろ……」

ウィルの頭を撫でてやる。

すると、緊張の糸が切れたのか大きな声で泣き出した。

俺に思いつきりしがみつくウィル。

もしかしたら、この世界に俺が呼ばれた理由はコレだったのかもしれない。

この子を地獄の檻から解き放つ為に。
俺はウィルを肩車すると。

「よし、外は寒いから中に入るか」

俺は城へと歩いていく。

そこに、さっきの地震で目を覚ましたと思われる
リーシェが出てきた。

「王様大丈夫ですか？ あれ？ その子どうしたんですか」

ウィルは酷くおびえるような仕草を取る。

自分の姿が俺以外に見えてるのにビクビクしてるんだろう。

「すまないリーシェ、この子を城で保護できないか？

いままで一人ぼっちだったんだ」

「えっ？ 私は構いませんよ？」

「だって、ウィル」

恥ずかしそうに頷くウィル。

リーシェがウィルの近くに寄ると。

「初めまして、私はリーシェルトルド・パトリオット・デイス・
パール・デモント

アルモーデイスって言うの」

「は、初めましてリーシェルトルド・パトリオット・デイス・パ
ール・デモント

アルモーデイスお姉ちゃん、僕はウィルって言います」

うおっ！？ 一言で覚えれるのか？

その言葉にリーシェもビツクリ顔だ。

「ヨロシクね、ウィル君」

「う……うん」

これなら上手くやっていけそうだ。

そして朝日が昇る。

ウィルのこれからを祝福するかのよう。

第十四話「正月の遊び」

「あけましておめでと〜」

ワイイとはしゃぎながら新年の挨拶を交わすウィル。

あの後、ウィルをお城で世話する事にした。

服はパジャマでは良くないから、とりあえずパーカーみたいな白い服と

白の長ズボンを着用してもらった。

俺はとりあえずウィルに、元のアリシユレードに戻すように指示。

それと、記憶操作も駄目だよと指示。

そして、すっかりビル工事は止んだ。

こうして元通りのアリシユレードになったと思っていたが……。

「ウィル、アリシユレードに正月あるのか？」

「用心深いな、有ったの。万事結果オーライ。わかる？」

などと、意味不明にはぐらかされる。

まあ、こういうのは別にあってでもいいか。

今広間には、ゼロにモンタ議長。そして、リーシェ、ウィルに俺。いつものメンバーが勢揃いというわけだ。

まあ……このメンバーが揃うといつも何か起こるから怖いんだけどね。

「お姉ちゃんの作った料理美味しい！」

「ありがとう、ウィル」

「また絶妙な味加減だね、この煮豆といい、卵といい。

ぽかぁ、今一番幸せだよ！」

「ほっほっほ、また料理の腕をあげよったの」

皆がリーシェの作ったおせち料理に箸をのばす。
一番驚くのはウィルだな。

たった一日で皆の輪に溶け込むこの順応の早さ。おそるべしチビツ子（3万歳）

「王様はどうですか？ 料理の味は？」

「えっ？ ああつ、最高！ うん、文句なし」
「ありがとうございます」

ニコツと微笑むリーシェ。

思わず照れてしまう自分が居た。

おせち料理を堪能した俺達はこれから何をするのか話し合っていた。

「やっぱりお参りかい？」

「いやいや、やはり書初めなんぞいかがかのう」

「えー、遊びたい！ 遊びたい！」

誰かに合わせようという大人はいないのか？
互いに意見を主張する子供達。

「王様、何か無いですか？」

「えっ？」

「そういえばお兄ちゃん意見出してない！」

皆の視線が俺に注目する。

ここは一つ、威厳を見せる時がきたようだ。

「寝るって言うのは？」

「「却下」」

はい、すみません、私が悪うございました。
皆さんは寝正月に興味なし。

「じゃあ、羽根つきとかは？」

「羽根つき？」

「そう。正月の遊びで、板で羽を交互に突き合う遊び」

手で羽子板の長さを教える。
すると。

「あつ！ 王様、私それ知ってます」

「えっ？ 本当？」

「はい。裏の庭に専用コートがありますからやってみませんか？」

「へえ、僕も見学してみたいねえ」

「お兄ちゃんやろう！ やろう！」

いや、今の文の中で非常におかしい部分があるけど？

ここは突っ込むべきなのか？

しかし、とりあえず俺はリーシェの案内する羽つき専用コートに移
動した。

今日は絶好の晴れ。
運動するにはもってこいの環境。

俺達は専用のユニフォームに着替えてコートに降り立つ。

目の前には芝生のコートに白線がしかれていた。

周りにはフェンスが張られている。

敷地を分ける為に中央に横一直線の低い網が敷かれていた。

そして、網のすぐ近くに、高くそびえる特等席が備えられていた。

こちら辺で見ている方はお気づきであろうか？

どう考えても、羽つきとは全く無縁の競技である事は。

「王様、どうです？ この専用コートは？」

リーシェがサンバイザーをつけて、専用ユニフォームに着替えていた。

「リーシェ、一つ言ってもいい？」

「はい？ なんですか？」

「コレは羽つきじゃなくて、『テニス』だよ」

「えっ！？ で、でも同じぐらいの板ですよ？」

まあ、確かにテニスラケットは同じようなものだけど、

正月じゃなくてもいいよね？ テニスは。

違うと分かりがつくりとうなだれるリーシェ。

「まあ、これはコレでやってみてもいいんじゃないかな？」

なあ？ と、皆に意見を求める。

皆さんも良いよーとこころよく賛成してくれた。

それからジャンケンの結果、初めに俺とリーシェが対決。
そして、審判には……。

「お兄ちゃん！ どうして僕が審判なの！？」

超不満そうに審判の席に着くウィル。
じたばたと駄々をこねていた。

「仕方ないだろ？ 他の二人が審判できないんだから」
「ぶ〜！」

「それじゃあ王様、いきますよ？」

サーブ権はリーシェに譲った。

ふふふ、誰が知ろう、俺は『テニスの王女』というテニス漫画を
全巻読破したテニス野郎だという事を！
最近見せ場が無いから、ここでいい所見せるチャンス！

リーシェが高々とボールを上げる。

ボールを見つめる顔は緊張しているのか、何処と無く
ぎこちなかった。

「えいつ」

可愛い声を出して、ボールを打ち出す。

パコンという愛らしい音が……しなかった。

むしろ、快音。

鋭利な空気を裂く音が聞こえ、ラインギリギリにワンバウンド。

呆然と見つめる俺の横をあざ笑うかの様に通り過ぎる。

地面に着く音と、フェンスにボールが当たった音が同時に聞こえる
程の

速さで撃たれたサーブ。

地面には、焦げ付いた印が刻まれていた。
その結果、俺が最初に発した言葉は。

「はい？」

これしかない。

何も見えなかった。

何時通り過ぎたのか分からないボール。
俺は地面とフェンスを交互に見つめる。

「0（ラブ） - 15（ファイティーン）」

そして、何事も無かったかのように容赦なく点数をつける審判。
いや、ちよつと待つてよ、これテニス？
フェンスの金網歪んでるんですが？

「お兄ちゃん、ルールでわかんないところあるんだけど？」

「えっ？ 何？」

「プレイヤーが死んだ場合、殺した側の勝ちなの？」

さらつと言いくい事を言うチビツ子審判員。
今日の晩御飯何？ みたいなノリだった。

「勝ちじゃ有りません。というより、起こつたら駄目。絶対」

起こりそうで怖いからハッキリ断言。

なにやらリーシェのほうを見ると、墨を用意していた。
そして、俺の方に近づいて。

「じゃあ、王様落としたので顔に墨入れますよ？」

「えっ！？　ここだけ羽つきのルールな訳！？」

「そりゃあ、だって、正月ですもん」

容赦なく俺に墨を入れるリーシェ。

左目に大きく丸を書かれる。

「じゃあ次いきますよ？　王様」

「どんだん来て」

だって、どうしようも無い。半ばヤケクソ。

あんなの普通に受けたらどうなる事やら。

リーシェの一方的なゲーム。俺はただの一步も動けず。
容赦なく墨が顔を埋め尽くす。

ラストゲームになってリーシェに異変が起きる。

俺の顔はもう見る影もない。

鼻毛かかれるし、ほっぺに渦巻き模様。

目蓋の上に眼を書かれる。

フェンスの向こうで、椅子に座ってみてるゼロとモンタ議長も必死に笑いを

こらえていた。

「ま……魔王君、い、言っではなんだが君の顔は
魔王というより阿呆あほうだね」

クックククと笑い声を押し殺して笑うゼロ。

くっ、どうか神様、奴に天誅を与えてやってくれ！

リーシェがプルプル震えながら最後のサーブを繰り出そうとしていた。

しかし、そこで突然。

「プッ、あははははは。駄目、もう限界です王様」

笑いながらサーブを撃ちだすリーシェ。

その殺人サーブはあらぬ方向に。

俺の横を大幅に通り過ぎ、ノーバウンドでなんとフェンスの向こうにいるゼロの顔面に直撃した。

椅子に座りながら当たった勢いで、

縦に四回転半ひねりを披露するゼロ。

皆その光景に拍手。

無論、この後着地はど派手に失敗。

ヒギヤーとか叫び声をあげながらポーンと椅子から投げ出された。天誅だよ、ゼロ。

「まあ、とにかくこれでリーシェにも墨が入るな」
「えっ」

俺は墨を持ってリーシェに近づく。

リーシェの顔に、容赦なく鼻毛を書き入れる。
そのギャップに俺は耐えられず。

「ぶっ……あはははははは」

思いつきり笑ってしまった。

腹を抱えながら悶えていると、リーシェも鏡で自分の顔を見て笑い出す。

「いや、こりゃ傑作だ」

「ですね」

「お兄ちゃん！ 次、僕の番だよ！」

「ああ、わかってるわかってる」

こうして、墨を入れる羽つきならぬ羽テニスは続いた。皆、顔面墨だらけ。

「いやあ、楽しかった」

「そうですね」

「お兄ちゃん、全身墨だらけじゃない」

「仕方ないだろ？ 顔面に入れるところが無いから他のところに入れるしか」

「ホッホッホ、笑う門に福来る。良い正月の幕開けじゃのう」

皆で笑いながら城へと戻っていった。

あれ？ なんか忘れてるような……。

この1時間後、ゼロの存在に気づき病院へと搬送した。お参りならぬ、お見舞いになってしまった。

第十五話「決行！N作戦（前編）」

――事件は突然起こった。

俺は広間にコタツを置いてぬくぬくと過ごしていた。
他にはゼロがコタツの中に入って寝転んでいた。

「ゼロ、お前何かやる事ないのか？」

「リーシェに会いにきたんだけど、いないから
ここで待たせてもらってるのさ」

「はいはい」

などと、他愛も無い話をしていた。

ゴロンと俺は寝転がる。

そこに何を思ったのか、コタツによじ登る元気なチビツ子。
そして、ウガーと叫びながら。

「長井直伝！ フライングボディアタック！」

「ぐほっ！？」

寝転がっている俺に向かって飛び込んできた。
つて、長井つて誰だよ！

「お兄ちゃん、コタツでゴロゴロよくないよ？」

「いたたた、今のウィルの攻撃で腰が……」

「えーっ、運動不足だよお兄ちゃん」

「仕方ないだろ？ 今お兄ちゃんは腰痛で動けなくなっただから」

無論、嘘である。

「腰痛？　じゃあ、温泉に入れば治るって聞いた事あるよ！」

「温泉？」

「温泉かい？」

温泉という言葉に二人の男が反応。

よからぬ企みを考え付く。

そして、それはゼロも同じようだ。

「あいたたたた」

「えっ？　どうしたのにおにいちちゃん」

「腰が急に痛み出した」

「わお、それは大変だ魔王君。すぐに温泉に入らないと」

「おお、それはGOODアイディーアだ、ゼロ」

「すぐに宿の手配をするよ、持つべきものはやはり友だからね」

「できれば、露天風呂がいいな。そんでもって、皆で行きたいよな」

「ははは、そんな無礼千万のわがままも、今日だけは何故か聞いてあげよう。」

「いい所知っているんだ」

互いにニヤリと笑う俺とゼロ。

そして、俺達の三文芝居に口をぽかーんと開けたままのウィル。

こうして、俺達は温泉へと向かう事になった。

「うわー」

感嘆の声をあげるリーシェ。

俺達の目の前には、自然に囲まれた宿があった。

決して大きくは無いが、立派な風格を漂わせる和風の宿だ。

「ハッハー、この名物は露天風呂なんだよ。皆、ゆっくり
していくといいよ」

ワイワイとはしゃぐリーシェ達に対して、俺はゼロの横に
歩きながら隣接する。

「ゼロ、例の件はクリアしているのか？」

「当然だよ魔王君。僕を誰だとおもっているんだい？ 作戦会議は
部屋に入ってからだよ」

「ふっ、さすがだな」

ハッハッハと笑っていると、俺達の悪さの匂いを嗅ぎつけたのか
俺達に忍び寄るチビツ子警官。

「ねえねえ、何企んでるのお兄ちゃんたち？」

「いや？ 俺達はなーんにも企んでないよ？ なあゼロ？」

「勿論だよ。まあ、強いて言うなら温泉に入る事だけかな？」

「嘘。お兄ちゃんとゼロがそんな仲良くしてるの初めてみるもん」

「ふっ、何を言っているんだウイル。俺達は何時も仲良しだぜ？」

「僕と魔王君はブラザーさ」

肩を組んで仲の良さをアピール。

なっ？ と顔を向かい合わせる。

「……むう、いいもんだ」

プイと顔を背けて宿に入っていくウイル。

すまないなウイル。お前にはこんな悪の道に入ってほしくないんだ。

宿に入ると、女将さんの案内で部屋割りを教えられる。

その結果。

「お兄ちゃん！ どうして離ればなれなの！？」

「まあ、仕方ないんじゃないかな？ ゼロが決めてしまったから」

「申し訳ないね、ウィル君」

俺とゼロ。そして一言も発していないがモンタ議長もいる。

そして、間^{あいだ}をおいて離れの部屋にリーシェとウィル。

「また後でな、ウィル」

それだけ言つて、俺達は部屋の中へと入っていく。

中は和室の造りで3人が寝れるほどの畳の数に、中央に茶色の長テーブル。

そして、俺達はすかさず長テーブルに集結する。

「いよいよ、この時がきたのじゃな？」

「ええ、モンタ議長」

ごくりと生唾を飲み込む俺達。

ゼロが長テーブルの上に宿の周りの地図を広げる。

「では！ これより「NOZOKI」作戦の詳細を報告する！」

うおー！ と、叫ぶ馬鹿三人組。

NOZOKI作戦とは！ 単純に風呂場のぞき。

「ゼロ、それでどうするんだ？」

「ふふふ、ここの宿の露天風呂は外にでて3分ほど歩いた所に
広い天然風呂がある。周りには柵があり、見る事は不可能」

「なんじゃと？ それでは話が違うではないか？」

「まあ待ちたまえモンタ議長。僕がそんなミスを犯すわけないだろう？」

ゼロはある一点を指差す。

「ここは？ 山みたいだけど？」

「そう、露天風呂の裏山。この山のあるポイントでは露天風呂が丸見えなのさ！」

おおー！ と声を上げる俺とモンタ議長。

「しかも、露天風呂側からは湯気と草むらで 全く見えないという優れもの！」

ここまでいければパラダイスさ」

「では、作戦決行時間は何時にするんじゃ？」

「そうですね、風呂は男女交代制で、風呂は8時から9時が女性用。つまり、7時にはこの山のふもとまで行きたいですね」

綿密に計画を練る俺達。

その姿は真剣そのもの。

「では、作戦決行時間は19：00だね？」

「ああ」

「それがベストじゃな」

納得して頷く俺達。

さあて、時間が待ち遠しいな。

「ん？」

「どうした？ ゼロ？」

「いや、何か視線を感じてね」

「視線？」

「そうだね、例えば……『ふふふ、お兄ちゃん達、そんな事考えてたんだ。』

僕を仲間はずれにするのは良くないよねー？ いけないよねー？
やっぱり、天誅が必要だね。うん、決めた。スペシャルハードなお仕置き

を考えたから覚悟しておいてね？」みたいな視線だったな」

なんですかその、どす黒いオーラ出しまくりの視線は。
何かスゴイ心当たりがあるんだが。

その後夕食を皆で食べ、俺達は作戦を決行した。
皆固まって動く怪しまれる為、別々に行動して
合流する事に。

「あーあ、こちら魔王。ゼロ聞こえるか？」

『OK、トランシーバーの感度は良好だよ』

『こっちもOKじゃよ』

そして、俺達は山のふもとの合流ポイントに到着した。
迷彩服に首からは双眼鏡を装備。
どこぞの軍隊のような格好だった。

「いいかい？ ここから最短で40分もあればポイントに到達できる
抜け駆けは無しだよ？」

ゼロの言葉に一同が頷く。

そして、急ごうとしたが……。

「なあ、ゼロ」

「ん？ どうしたんだい魔王君？」

「あれなんだ？」

俺が指差す方向に、切り株の上にドーンとテレビとビデオデッキが置いてあった。

いかにも再生してくださいという雰囲気出しまくりに念のため、スイッチを入れる。

『やつほー！ お兄ちゃん元気？』

「う！ ウイル！？」

そこには紛れもなくウイルスの姿が。旅館のどこかで撮ったと思われる室内映像だった。

『僕には、お兄ちゃん達がノゾキにいくのはもうバレてます』
「げっ」

『でも安心して、お姉ちゃんには伝えてないから』

ニツコリと微笑むウイルス。

俺は思わずテレビに抱きついた。

ウイルス、お前は本当に良い子だ！

『その代わり』

「ん？」

『この山周辺に罾を仕掛けさせてもらいました』

「な！ なにー！？」

『別にお兄ちゃん達が僕を仲間はずれにした事を』

恨んでるわけじゃないんだよ？

ただ、やっぱりコレくらいのハードル無いとね？』

ね？　じゃねえ！　何してるんだウィル！

ノゾキの時点でハードルはあるんだから要らないの！

『まあ、単純に死ぬぐらいの量の畏仕掛けたから。がんばって』

そういつてブツンと切れた。

最後にトンでもない言葉残して。

ウィルは嘘は言わない子だからなく、良い事も悪い事も。

「駄目だなコリヤ。ゼロ、今回は諦めよう」

あーあ、と振り返って帰ろうとした時。

「待ちたまえ！　魔王君！」

背中越しにゼロが唐突に叫ぶ。

思わず足が止まる。

「君は、目の前のディナーを残して帰るような失礼な奴だったのかい？」

「はあ？　どういうことだ？」

「考えてみたまえ。今回みたいな事が一体何回あると思う？　もしかしたら今日が最後かもしれないんだよ？」

「だけど、ウィルが畏を仕掛けてるんだぞ？」

俺の言葉に、フツとクールに笑うゼロ。

ゼロは背中にあつたリュックサックを広げる。

そこからは、暗視ゴーグルに銃など、戦場一式セットがあった。今から一体どこに行く気だよ？　といわんばかりの豪華セット。

「ゼロ、まさか」

「フツ、想定範囲内さ」

お前の想定はどれ位なんだよ。
のぞきにいくのにライフルとかって。

「お主、まさかのぞきに行くのに武器も持ってこなかったのか？」

などと、あるまじき発言をおっしゃるモンタ議長。
持ってくるわけ無いだろ！

「魔王君、僕達は仲間だろ？　この障害を乗り越え、楽園を手にする
為に君の力が必要なんだ」

「ぜ……ゼロ」

なんだこのやけに頼りになるゼロは？

今までこんな事があつただろうか？　いや、無いな。

アホ二人の姿が光り輝いて見える。

俺達はガツチリと円陣を組む。

「いいのか？　もしかしたら死ぬかもしれないんだぞ？」

「フツ、魔王君。覚悟の上さ」

「わしらはもはや一心同体じゃ」

今、この時より俺達に真の友情が芽生えた（一時的な）

「すまない、俺は今まで君たちを『毎日城にきて、こいつらやる事無いのかよ？

冗談抜きで追い出したい』としか思っていなかった」

「そんな事、僕達の友情の前では関係ないさ」

「そのとおりじゃ」

そして、腕時計を前に出して時間を合わせる。

「3、2、1……作戦開始だ！」

こうして、俺達は夢の楽園を求めて
死の匂い漂う夜の山へと入っていった。

第十六話「決行！N作戦（後編）」

俺達は夜の山を越えようとしていた。

暗く視界も悪い上に、草木が遠慮なしに生えている。

これでは進むのも大変だ。

付け加えて、チビツ子悪魔の容赦ない罠がそこらじゅうに仕掛けられてるときだから、さあ大変だ。

無事にポイントに辿り着けるか？　と言うより、無事に生還できるのか？　俺達。

「魔王君！　何をボーっとしてるんだ！」

「動きが遅れとるぞ！」

「あ、ああ悪い」

身を低くして素早く走るゼロとモンタ議長。
どこでそんな特殊訓練受けてるんだよ……。

「ん？」

ゼロとモンタ議長があるポイントで固まる。

見てみると、なにやら地面にワイヤーらしきものが張られていた。
ウィルもまだまだ子供だな。

こんな分かりやすいトラップ仕掛けるなんて。

俺はひょいっと、そのワイヤーをくぐろうとしたら。

「馬鹿もん！」

「えっ！？」

イキナリ首根っこつかまれて引き戻される。
そして、モンタ議長に胸倉を掴まれ、凄い形相で。

「お主は何をしにここに来たんじゃ！ のぞきにきたんじやないのか！？ そんな軽はずみな行動をするんじゃない！ 死にたいのか！」

などと、お叱りを受ける。

いや、真面目な顔してそんな事言われても。

「よく目を凝らして見よ！」

「えっ？」

モンタ議長が指差すところに、分かりやすいワイヤーのすぐ後ろに極細のワイヤーが仕掛けられていた。

「二重トラップじゃよ、トラップを潜り抜けて安心したところに本命のトラップでドン！ 初歩中の初歩じゃ」

フフツと笑うモンタ議長。

というか、これでウイルの本気具合が分かったな。

今度からはウイルをのけ者にしないでおこつと心に誓うのであった。

それから、俺達は山の中腹に差し掛かる。

残り時間は30分。

数多の罖を潜り抜ける勇敢な戦士達。

「よし！ このまま行けば間に合うよ！」

「本当か！？ ゼロ！？」

「ああ、中々味のあるトラップばかりで少々手間取ったけど、もう品切れかな？」

いや、今までののが凄かったからね。

赤外線センサーやら、落とし穴、果てには地雷なんか仕掛けられてましたから。

しかし、^{ほんのう}煩惱で最強の兵士に進化したアホ二人の前ではそんな凶悪な罠も霞んでしまう。

あれよあれよと、解除していくではないか。

「よし！ このままいくぞい！」

「おおっ！」

ゴーゴー！ と破竹の快進撃で突破していく。

だが、俺達の考えが非常に甘かった事を痛感する。

山の中腹を越えて、頂上に差し掛かった。

後は下れば終りなのだが、突然足を止めるゼロとモンタ議長。

「？ どうしたんだゼロ？」

「……マズイね。どうやら、ウィル君を舐めていたようだ」

「そうじゃな」

額に汗を垂らして突然銃を構える二人。

なぜそんな行動をとったのかはすぐに分かった。

周りの草むらからうなり声が聞こえる。

「な、なんだこの声？」

「どうやら、魔獣の類だね。大体数は40体ほどだ。どうやらウィル君は実力行使も用意していたみたいだね」

「……ここはわしが引き受けよう」

「えっ！？ モンタ議長？」

両手に銃を取り、どつしりと構えるモンタ議長。

「それだったら、俺が残った方が！」

「ワシは足がもう限界じゃ、それにお主たちには大事な使命がのこっておるじゃろ」

ふっ、と僅かに笑みを見せるモンタ議長。
なんだ？ この展開は。

「ゆけい！ ワシの屍を超えて！ そして見事に使命を全うするのじゃ！ のぞきという名の大事な使命を！」

「も、モンタ議長！」

「行くぞ魔王君！ モンタ議長の死を無駄にするんじゃない！」

そして、草むらから一斉に飛び出てくる魔獣が！

……ん？ あれ？

草むらから一斉に飛び出てきたのは紛れもない子猫。

ニャーニャーとモンタ議長に飛びかかっていく。

「なにをしとる！ ワシがこの魔獣を引き付けてる間に早くいけい！」

おい、そのどこが魔獣だよ。

ちよっと心配した俺が馬鹿だった。

「じゃあ、モンタ議長。その魔獣と適当にじゃれててくださいねえ、後で助けにきますから」

あゝあと、ガツカリしながら山を下る俺達。
残り15分。時間がない。

「どこが魔獣なんだよゼロ」

「君は分かかってないな、あのかわいい子猫を君は殺せるかい？」

「うつ……で、出来ない！」

「そう、可愛さこそが武器！ あつちは一方的に僕達を切り刻んでくる。」

僕達はそれに耐えるしかないんだ。まさに、魔獣じゃないか」

くっ、不覚だった。

確かにあの可愛さは魔獣の類に匹敵する。

俺ならつい撫でてしまったり、遊んでしまっ

恐るべし！ ウイルの策略。

もうまもなく、夢の楽園ポイントに到達する。

罾も全てかいくぐったみたいだ。

浮かれ気分だった俺達に、ウイルスの最後の罾が待っていた。

「おいおい、これは無しだろ？」

「あちゃゝ、ウイルス君容赦無しだね」

俺達はそれを見て呆然。

目の前に10mほどの竜が存在していたのだから。

鋭い牙と目、赤い鱗がビツシリと生えている。

時折鳴くうなり声は、目の前の俺達を震え上がらせるのには十分な迫力だった。

その結果。

「無理無理、ゼロ、帰るぞ。こんな超生物勝てないって」

さすがに諦めました。

踵を返して帰ろうとしたとき、ゼロは俺に何かを投げってきた。それを慌ててキャッチする。

「こ、これは！？　今ヨツハシカメラで売っている最新型のハンデイカメラ！　

ズーム10段階可能、手ぶれ無し、従来の3倍の画質（当社比）を誇ると

いわれる優れものじゃないか！？」

「魔王君、ここは僕に任せたまえ」

「ぜ……ゼロ！」

「行くんだ！　そして、僕の代わりにそのビデオカメラに必ず画像を納めてくるんだ！」

ゼロの決心は固かった。

いくら煩惱によって最強の兵士と化したゼロでも、竜を相手には勝てまい。

ゼロの背中が語っていた。

『時間稼ぎぐらいならできる。だから、君に全てを託す』と。

「ゼロ、本当にいいのか？」

「ああ」

「……良かったら、ダビングしてもらっていいか？」

「勿論だとも」

ゼロは刀を取り出し、竜と対峙していた。

一瞬の隙を突いて、俺は竜の裏へと回る。

「さあ！ 行くんた魔王君！」

「ああ！ さよならは言わないぜ、ゼロ！」

「無論だ。ほかあ、こんなところで死ぬわけにはいかないからね！」

アチョーと、竜との戦いの火蓋が切つて落とされた。

俺はゼロの方を振り返らずにただひたすら走った。

残り時間は後5分！

俺は懸命に走った。

今までの犠牲を無駄にしない為にも！

そして、ついにあの草むらの向こうが念願のポイント地点！

俺は一気に駆け抜けた。

「ゴール！」

肩で息をしながら、録画の準備に取り掛かる。

待ってる、皆の犠牲を無駄に……ん？

隣から何やら拍手が聞こえてくる。

おかしいな？ ここには俺しか居ないはずなんだが。
横を向くと。

「り……りーしえ？」

凄い笑みを浮かべて、俺に拍手を送っていた。

「ど、どうしてここに？」

「愚問ですね、裏から凄い音が響いているのに温泉に入る人はいません。私はここで調査をしていたら突然王様がゴールとか

いいながら駆け抜けてきたんじゃないですか」

リーシェの顔が段々変化してきた。

仏のような顔から、ギロリとすごむお兄さん顔に。

目からビームでも出るんじゃないか？　と思わせる眼力。

「一応聞いておきますけど、ここに何をしにきたのですか？」

「あつ、いやゝちよつとランニングをね、最近運動不足で」

「その格好ですか？」

「えっ？」

リーシェに言われて自分の格好を見る。

迷彩服に首から双眼鏡、片手にハンディカメラ。

うん、弁明の余地なし。

自分の嘘の下手さには参りましたなゝハハハ。

「あ、あの、リーシェ話せば分かる」

「話す事はありません。素直に自分の罪を清算するべきですね」

リーシェから何か凄まじい殺気を感じる。

先ほどの竜が、かわいいくらい。

最後にして最大の恐怖が俺に襲い掛かった。

「王様のーーーーバカーーーー！」

鋭いアッパーが俺の顎を的確にヒット。

場外ホームランならぬ、場外アッパー。

その後、俺達三人はコテンパンにリーシェに絞られました。

第十七話「パンドラの箱(?)」

前回の事件より一ヶ月が経った。

あの時のリーシェの顔が目蓋に焼き付いている。

例えると「鬼」だな、うん。

今回ばかりは本当に殺されるかと思った。

その後、なんとかリーシェの機嫌も直ってほっと一息。

そして、今日は俺にとって待ちかねた日だった。

そわそわと広間を歩き回る。

「お兄ちゃん、どうしたの？ そんなにそわそわして？」

「フッフッフ、ウィル、今日は何の日だ？」

「えっ？ 今日？ …… あ、もしかして」

「そう、今日は「バレンタイン」なんだよ！」

ニコニコと笑顔で話す。

なぜなら、今日の朝早くからリーシェが台所に立っているからだ。
俺が何事かと台所を尋ねた時。

「だ、駄目です！ 王様は広間で待っていてください！」

と、追い出される始末。

その時に見えた材料はまさしくチョコ！

ほぼ確実に渡してくれると俺は踏んでいる。

毎年この日は辛いモノだったが、今日ばかりは違うようだ。

ああ、この日がこんなに嬉しく感じるのは初めてだ。

「お兄ちゃん嬉しそうだね？」

「勿論。だってリーシェのチョコだよ？ あの料理の腕で手作り。きつと、あまりの美味しさに心も身体もホットだよ」

ムッ、いかな、あまりの嬉しさに言葉がおかしくなる。今、俺はしあわせの絶頂にいた。

……にも関わらず、やけに気になる奴が一人。

「おい、何でそんな隅で震えてるんだよ？」

部屋の隅でガタガタと震えているゼロがいた。その様子は凍死寸前のお方のようなようだ。

「ま、魔王君、君は本気でそんな事言ってるのかい？」

「？ どういう意味だよ？ あつ、さてはチョコももらえないのか？」

「ハッ、それは無いよ魔王君。リーシェからは義理だけど、チョコを貰っているさ」

「むっ、だったらなんでそんなに震えているんだよ」

「君は本当の地獄を知らないからそんなのんきな事いえるんだよ」

ハッハッハッと、歯をガタガタと震わせながら笑うゼロ。

なんだ？ 今日はどことなくテンションがおいしいぞ？

「失礼な、俺は地獄なら何度も見てきたぞ？ 8話とか、16話とか」

「そんなモノはこの話の為の前菜だよ！ 言うだろ？ 天国を見てないよ」

本当の地獄と言うものは分らないって？」

「むっ、あまり考えたくないが、今回はそれ以上だと言うことか？」

「YES！ その通りだ魔王君。リーシェの料理はチョコだけは別なんだよ」

突然涙を流しながら喋りだすゼロ。
ヤバイ。

なんだか良く分からないけど、今回は非常にヤバイのだけは分かる。

「どういう意味なんだよ？ ゼロ」

「そうだね、冥土の土産に昔話をしてあげよう」

……え？ 冥土の土産？ どういう意味ですか？

フツとキザな顔に戻るゼロ。

そして、身も凍るような話を語り始めた。

「あれは、僕が学生の頃だった。リーシェに初めてバレンタインで
チョコを

貰ったんだよ、ほんの小さな義理チョコだった」

「へー、良かったじゃないか」

「ぼかあ、感動のあまり直ぐにそのチョコを食べたよ。リーシェに
どれだけ君の

チョコが美味しいのか伝えたくて」

「それで？ どうなった？」

「……気づいた時には病院にいたよ」

「……………は？」

「ぼかあ、チョコを食べてそのまま気絶。二日間生死の境をさまよ
つたらしい。

わかったかい？ 彼女はチョコ作りだけは劇的に下手だという事
を」

「じゃあ、なんで今ここにいるんだよ？」

「ハッ、当然リーシェからチョコをくると連絡が来たからね。如何にチョコが

殺人級のものだとしても、リーシェへの愛は変わらないからね」

と、いきがるゼロ。

笑っているが、膝も笑ってらっしやる。

まさかあゝと、言いたかったがゼロのただならぬ様子を見る限り、嫌な予感。

下の台所から甘いチョコレートの香りが広間に伝わってきた。

「あれ？ 結構いい香りじゃないか？」

なんだ、どうやらゼロの心配してる程の事じゃないな。

ゼロも香り嗅いで幾らか顔が緩んできていた。

随分と上達してるに違いない。

「ウィル、ちょっと来てー」

下の階からリーシェの声が聞こえてくる。

それに元氣良く返事をして台所に向かうウィル。

「なんだよ、心配して損したよゼロ」

「そ、そうだね、どうやら僕も心配して……」

「……ああああ」

……なんですか？ 今の悲鳴は？

下の階から聞こえてきたような？

ゼロはその悲鳴を聞いて顔を手で覆い隠す。

まるで、「やっぱり止めるべきだった」と自分の罪を悔いるように。悲鳴が聞こえて数分後。

広間の扉がゆつくりと開く。

そこから、真つ青な顔をしたウィルが現れた。
すぐさま駆け寄る俺達。

「お、おい！　しつかりしろウィル！」

息を荒くしながら何とか呼吸をしているウィル。

「お、お兄ちゃん……逃げて」

「へっ？」

「ぼ、僕が食べたのはまだ完全体じゃなかったから助かったけど、
もし

完全体をたべたら、お兄ちゃん『死んじゃう』よ」

「完成品」じゃなくて「完全体」なの？

ウィル、お前何食ってきた？　それはチヨコなんだよね？

その後、ガクツと気絶してしまったウィル。

ゼロはその様子を見て、どこかに電話をかけていた。

「あ、僕だ。悪いんだけど、至急「葬式」の準備を手配してくれ。

えっ？　誰か死んだのか？　いや、今から死人が出ると思っから」

おい、そりやどういう意味だよ？

まさか、チヨコで人が死ぬとでも言うのか？

そんな事を考えていると、誰かが階段を昇ってくる音が聞こえる。

「ふふふ、今日はすごく良く出来たな、喜んでくれると嬉しいな
」

などと、幸せ一杯の声が聞こえてくる。

そして、運命の扉が開かれる。

「王様、おまたせしました」

ニツコリと満面の笑みを浮かべて広間に入ってくるリーシェ。手には綺麗にラッピングされたハート型のチョコ(?)を持っていた。

「はい、王様どうぞ!」

少し頬を紅く染めて俺に両手でしっかりとハートのチョコ(?)を渡してくれた。

そして、リーシェはゼロにも違うチョコレートを渡していた。

俺はゼロの方をチラリと見る。

顔が真っ青で、引きつった笑いを見せていた。

「王様、開けてみてください」

「えっ? あ、ああ」

ラッピングされたチョコ(?)に手をかけると、何故か手が止まる。

俺の本能が危険を察知したのか、これ以上手が進まない。

開けてはいけない。

これは、さながらパンドラの箱だと。

「王様?」

「えっ!? あ、いや、今はお腹一杯だし、後で食べるからこのまま置いておくよ」

我ながら、ナイスな切り返し。

これならリーシェも仕方ないとあきらめて……。

「王様、もしかして食べたくないんですか？」

「えっ！？　そ、そんな事ないよ！　食べたいけど、今はお腹が…

…」

「食べたく……ないんですね？」

「食べます。今すぐ食べさせていただきます」

確かに、リーシェが俺のために頑張って作ってくれたんだ。

これに応えないのは男としてどうか。

パンドラの箱にも最後には希望が詰まっていたといわれている。

これも同じく、希望が詰まっているにちがいない！

おれは意を決してラッピングを解いた。

するとそこには、可愛らしいハート型のチョコ……に真ん中から亀裂が。

色はつややかな黒、かと思いきや、奇を狙ってか『紫』

紫のチョコとは何事ですか？

ほのかに刺激臭が……無論、香りは甘くない。

先程の甘いチョコレートの香りは何処に？

ひとかけらも希望が無さそうな物体が出てきた。

嫌な汗が滝のようにあふれ出す。

目の前には、今か、今かと俺が食うのを待ちわびているリーシェが。

「さあ、王様。ガブツといっちゃってください」

わくわくと期待に満ちた目で俺を見る。

リーシェさん、ガブツと逝っちゃいますよ？　勿論俺が。

見るからにこれ毒だよね？

「リーシェ、一応聞いておくけど、味見した？」

「ハイ！ 勿論です！ ウイルにちゃんとしてもらいました」

……つまり、コレがウィルの言っていた「完全体」か。
成る程、的を射ている。

こんな恐ろしいものがこの世に存在していたとは。

「じゃあ、ほかぁコレで帰るよ」

危機を感じてか、そそくさと帰ろうとするゼロ。
そうは行かない。

旅は道連れだからな。

「いや、ゼロもここで食っていけよ？」

「ぼ、ぼくもかい！？ い、いや、ちよつと急いでいるから」

「何だ？ リーシェのチョコが食べれないのか？」

「そ、そんなわけないどろ？ ぼ、ぼくに限って」

あまりの恐怖からか、ろれつが回っていないゼロ。
自然と逃げられない状況に。

二人ともチョコを手を持ったまま微動だにせず。

その光景にやや怒っているリーシェ。

とりあえず、チョコ（らしき物体）を舐めてみた。
瞬間。

「ふ、フグオ！？」

体がしびれ、全身に鳥肌が一斉に立つ。

意識が飛んでいく。

あつ、死んだおじいちゃんが……。

「ま、魔王君！　しつかりしろ！」

ゼロの声でハッとカロウじて意識を保つ。
舐めただけでこの威力。

これは新手の殺人兵器として使えるだろう。

「ぜ、ゼロ助かったよ」

「それほどの威力なのかい？」

「ああ、一瞬花畑が見えるぐらいな」

ぼそぼそと小さな声で話す俺達。

「王様、どうしたんですか？」

「い、いやあ、やっぱり今日はちょっとやめとこつかなって」

いくらリーシェの願いでもこりやマズイ。

味もさることながら、生命に関してもマズイ。

そんな事を考えていると、リーシェが僅かに涙目になっていた。

「ひ、酷いです。一生懸命作ったのに」

目から涙を流してしまったりシェ。

そ、そうだよな、俺の為に作ってくれたんだ。

これで食べないのは失礼だ。

俺は、その顔を見て意を決した。

「いやあ、今から食べるよ！　ガブツと行くから見えて？」

「ほ、本当ですか？　王様？」

「勿論」

「ほ、本気かい！？　魔王君！？」

リーシェとゼロのテンションのギャップが激しすぎる。
コレをひとかじりするとどうなるか、結果は大体見えているが。

「じゃあ、いただきますーす！」

ガブツと勢い良く食べる。
その勢いで全て平らげる。
意外な事に、食べた瞬間は何も起こらなかった。
味は……まあ、あれだけど。

「王様、どうでした？」

「いやあゝ、とっても美味しかったよ」

と、話していると、突然寒気が。
成る程。あまりの激痛だと、後々痛みが出てくると聞いた事がある。
つまり、これもその類と同じって事ね。
全身から血の気が引いていく。
あつ、ヤバイなコレ。

「リーシェ、ちょっと出かけてくる」

「えっ？ あ、ハイ」

「ゼロも来ないか？ というより、きてくれないか？」

「わ、解った」

そうして、俺は広間を出た瞬間ぶっ倒れた。
原因は言つまでも無くあのパンドラの中身。
は、腹が……意識が朦朧としてきた。

「ま、魔王君しっかりしたまえ！
今霊枢車れいきゆうしゃを呼んで来る！」

いや、まず救急車を呼べって。
人を勝手に殺すな。

その後、病院に担ぎ込まれた俺は、1週間の入院を余儀なくされた。
原因は、『毒物摂取』と診断された。
普通のバレンタインが欲しいと切に願う俺だった。

第十八話「前兆」

あの悲劇の毒物チョコ事件より一週間が経過した。

何とか回復できたものの、一歩間違えればあの世に直行だった。

最近、何かと死ぬ一歩手前が多いな。

しかし、そんな悲劇も時間が経てば忘れてしまうもの。

今日もいつものどおりの朝を俺は迎えていた。

「ううん」

のびのびと体を伸ばす。

窓から差し込んでくる朝日が力を与えてくれる。

いや、元気っていいものだ。

「よし、今日はちょっと早起きたし、俺が朝食を作るか」

そして、てきぱきと私服に着替えようとした時。

「ん？」

奇妙な事が起こった。

腕輪を付けている方の手が一瞬透明になったのだ。

目の錯覚か？ と目を擦り再び目を見ると、元に戻っていた。

「……疲れてるのかな？」

もしや、以前のチョコの毒が抜けてなかったか？

まあ、手の方は元に戻っていたので、さして深く考えるものでもないな。

そうして、俺は台所へと向かい朝食を作るのであった。
しかし、この時既にある事件へと近づいていた事を知る由もなかった。

「「ごちそうさまー」」

二人仲良くハモるリーシェとウィル。

目の前のテーブルには綺麗に平らげていたお皿がならんでいた。
こうやって綺麗に食べてくれると、作った方も嬉しいものだ。

しかし、我ながらやけに料理の上達ぶりが凄いな。

前はカップ麺が限界だったのに、今では朝食のメニューならお任せあれと

言わんばかりの腕前。

「王様、私が後片付けしますから、ゆっくり休んでください」

「えっ？ いいの？」

「はい。だって、朝食を作っていたいた上に、片付けまでさせるのは

さすがに……」

そういつて苦笑いするリーシェ。

むっ、そういう事なら後は任せよう。

折角のご好意なので甘える事に。

「じゃあお兄ちゃん、遊ぼう！」

「よし、じゃあ何する！」

「異種格闘技戦！ 反則あり、武器ありの何でも有りの電流デスマツチが

いいなー！」

「ハッハッハ、こいつ、そんなの頼まれたってゼツテーしないか

らな。

素直に庭でボール遊びか鬼ごっこぐらいで我慢しなさい」

「えー、つまんない！」

「つまんなくて結構。そんな死ぬ事前提みたいな遊びに比べれば」

俺はウィルを肩車して庭まで運ぶ。

なんだかんだ文句を言いながらも、それで納得するウィル。

俺達は中庭でキャッチボールをすることにした。

「それじゃあ、行くよー」

「よし来い！」

えい！ と元気良く叫ぶウィル。

ふわりと舞う白球。

それは俺の胸元にスッポリと納まる。

「よし、それじゃあいくぞウィル！」

「バッチコーイ！」

などと、腰を低くして取る気満々の態勢をするウィル。

俺はウィルめがけて思いっきり投げた……のだが。

俺の目の前にポテンと弱々しくはねる白球の姿があった。

「あ、あれ？」

「どうしたの？ お兄ちゃ……」

ウィルが目を丸くして何かに驚いていた。

俺はウィルの視線を頼りに自分の片手を見ると、片手が姿を消したり現れたり

点滅を繰り返していた。

「ど、どうなってるんだ？ これ？」

何回か点滅を繰り返すと、また普通に戻った。

それを見たウィルは何処と無く雰囲気が変わっていた。

俺は落ちた白球を拾い上げる。

「悪いなウィル。それじゃあ投げるぞ？」

「いや、いいよ。それより、ちよつと場所変えようよお兄ちゃん」

「？ あ、ああ」

突然のウィルの態度の変化に驚いた。

無邪気なウィルが、以前の時と同じような冷たい目をしていた。

俺とウィルは自分の個室へと場所を移した。

「どうしたんだウィル？ さっきから怖いぞ？」

ウィルは個室に移る前からずっとブツブツと独り言を言っていた。

そして、個室に移ってから何か落ち着かない様子。

「お兄ちゃん、その症状は何時から？」

「ん？ 多分今日の朝からかな？」

「そつか……となると、やっぱり……それしかないか」

一人自己完結しているウィル。

少しは何を考えているのか俺にも教えて欲しいものである。

「おーい、ウィル？」

「お兄ちゃん、こつちの世界に来て何日目？」

「えっ？ たしか、一年ぐらい経つかない？」

むう、一年とはこんなに早いものだったのかと、しみじみ感じる。
毎日がハブニングの連続だったからな。

「そっか、やっぱり」

「えっ？ 何か関係してるのか？」

「うん。お兄ちゃんの魔王としての期間が切れるんだよ」

「おお、そういえばそうだったな！」

ポンと手を叩く俺。

確か一年間は魔王として働かないといけないうてリーシェに言われてたな。

すっかり忘れていた。

ん？ でも待てよ？

「ウィル、この手が消えかけになる症状と関係あるのか？ それ？」

「大有りだよお兄ちゃん。お兄ちゃんが魔王の期間が切れればこっちの世界には

いられない。お兄ちゃんは自分がいた元の世界に戻るんだよ」

「えっ？」

突然の宣告。

元の世界に戻る？ いや確かに嬉しいのだが……なんだろう？

この複雑な気持ちは？

確かに、今までは元の世界にすごい戻りたかったが、突然戻れますよと

言われると、少し心が揺らぐ。

更に、一年間の勉強のブランクに、他の皆は二年生。
ぬぬぬ……結構痛いな。

「お兄ちゃんが来た日は何時？」

「えっと、後10日後の朝だな」

「じゃあ、その日にお兄ちゃんは帰ってしまうんだ」

寂しそうな顔をするウィル。

そんなウィルの顔を俺は撫でてやる。

「もう俺がいなくても大丈夫だろ？ ウィルなら友達一杯できる。
寂しくないだろ？」

「そんな事無い！ お兄ちゃんいなくなったら寂しいに決まってる
じゃない！」

むっ、嬉しい事言ってくれるじゃないか。

うちの親もそんな風に思ってくれていると願っている。

帰ってきて、『あれ？ 帰ってきたの？』みたいな反応だったらど
うしよう。

「それに……」

「ん？」

「リーシェお姉ちゃんの事はどうするの！？」

「えっ！？ い、いやどうするって……」

「お兄ちゃんはリーシェ姉ちゃんの事好きなんですよ？」

はつきりと痛いところを突いてくるウィル。

俺はあたふたと戸惑いながらも、ウィルの質問に答える。

「あー、うん。好きだよ？」

「愛してるって事だよな？」

じっと見つめてくるウィル。

俺はその眼差しに「ごまかせない」と判断。

「……ああ」

「お姉ちゃんに告白しないの？」

「こー!? 告白!？」

「そうだよ! もう会えないの!ここで告白しないとおかしいですよ!？」

「い、いや、その」

俺は告白と聞いて口を濁す。

そんな事考えても無かった。

突然のタイムリミットにこれからする事も考え付かない。

俺は、リーシェやウィル達と楽しく過ごして、この世界の平和にしていければ

万事おつけーと、思っていたから。

「なんなら僕からリーシェお姉ちゃんに話をつけようか？」

「い、いや、それはやめてくれ」

「じゃあ、早く」

「だけどリーシェが俺の事好きじゃなかったら? 残りの十日間は普通に

過ごせないぞ?」

「そんな事考えてる場合じゃないって! 玉砕覚悟で告白だよ!」

玉砕! 玉砕! と、コールを巻き起こすチビツ子。

他人事と思ってか、楽しんでいる様子もある。

だが、俺もタイムリミットがある以上白黒付けておきたい……が。

「ウィル、やっぱりだめだよ」

「な」に言ってるんだよお兄ちゃん! くよくよしてても始まらない

いよ!？」

「そうじゃないんだよ、ウィル」

「えっ？」

「もし万が一、億に一でリーシェが俺の事が好きだったとしよう」

「いいじゃん! それでハッピーエンドだよ!？」

「本当にそう思うか? ウィル？」

「えっ? …… あっ」

ウィルはどうやら俺の言いたいことに気づいたようだ。

ふられたらそれでお終いでいいが、もし好きであればそうは行かない。

十日過ぎたら俺はいなくなる。

好きだと分かっていたればなおさら別れというのは辛いものだ。

それが二度と会えないと分かれば。

「お兄ちゃん……」

「俺の思いはリーシェには言わない方がいいんだよ」

ウィルは黙っていた。

俺の気持ちを分かっているからだろう。

この後、皆に俺が十日後にいなくなる事を告げる。
刻々とアリシユレードの最後の日が近づいていく。

第十九話「サヨウナラ」

突然のタイムリミットの宣告。

いきなり最後の日が決まるとなると、やりたい事というのが思い浮かばない。

そんなわけで、俺は最後の日が来るまで今までとなんら変わらない過ごし方をしていた。

タイムリミットの事を皆に告げると、最初は誰もが驚いていたが、日が経つにつれて普通に帰っていった。

今までアリシユレードに居た頃の記憶がふと甦る。

イキナリの魔王宣告に、ゼロやモンタ議長と言った魔族達に、ウィルの正体。

他にも様々な良い思い出があった。

そうこうしている間に、ついに最後の前日になってしまった。

俺は、ゼロにモンタ議長、ウィルとリーシェを広間に呼んでいた。

「いやゝ、ついに魔王君も念願の帰宅というわけだね？」

「まあ、そうなる……な」

「魔王君、君は僕にとって良きライバルだったよ。だから僕の事は忘れないでおくれよ？」

「ゼロ……」

すまん、俺はお前をライバルと思った事は無いと言う事は、心に留めて置こう。

「ホッホッホ、別れは必ずやってくる。しかし、お前さんの場合は早すぎるな」

「モンタ議長」

「向こうにいつでも頑張れよ？」

「はい。ですがモンタ議長、魔王をクジ引きで決めるのはやめてくださいよ？」

「えっ！？ わ、わかつとるわい！」

この人、俺が言わなかったらまたやりかねなかったよな？ 今の発言は。

「お兄ちゃん」

「ウィル、お前はこれから頑張れよ？ 今まで何も出来なかった分を取り返すつもりでな？」

「うん」

さてと、一番どう言えばいいのか迷う人の順番に来た。この世界に来てからずっと俺の事を支えてきてくれた。それは感謝の言葉だけでは足りないほどに。

伝えたい事は山ほどある。だけど、本人を目の前にすれば何を喋ればいいのか言葉が浮かばない。

「リーシェ……」

「王様」

じつと俺を真っ直ぐに見つめてくるリーシェ。

俺もリーシェを見つめる。

互いに言葉が出てこない。

そんな状況を察したのか、ウィルとモンタ議長が互いに目を合わせた。

「さてと、ワシらは退散するのでしょうかのう？ ウイルよ？」
「そうだねモンタおじいちゃん。さっ、邪魔者は退散、退散」

と、ウイルとモンタ議長は両脇にゼロを引っ掛ける。

ゼロはへっ？ といった感じでモンタ議長とウイルを交互に見る。

「ぼ、ぼかあまだここにいるよー！ ちよっ、あー……」

有無を言わず広間から連れて行かれるゼロ。

ボタンと勢い良く広間の扉が閉まる音がする。

こうして、広間には俺とリーシェの二人きりになってしまった。

その状況に、ますます固まる俺達。

だが、いつまでもこうしているわけにはいかない。

俺には時間が無いのだから。

「な、なあリーシェ」

「は、はい、なんですか？ 王様」

「その、最初に出会ってもう一年が経つね？」

「え、ええ」

とりあえず会話を続けないとマズイ。

一度途切れると、また喋るのに時間がかかる事は目に見えている。

「俺、リーシェに出会えてよかった」

「えっ？」

「初めは、元の世界に帰りたいってずっと思ってた。だって、知らない世界で

誰も頼る人も、知ってる人も居ない。そんな俺をずっと支えてくれたのがリーシェだ。

リーシェに出会えてなかったら、俺はこの世界で生きていけなか

った」

「そ、そんな！ 大げさですよ！」

「大げさなんかじゃない、本当なんだ。元の世界に帰れると分かっても、心のどこかで

この世界に居たいとおもっている自分が居る。リーシェと一緒に居たい、もつと話したい、

もつと笑い合いたい、もつと……」

ん？ なんかこれって、告白に近くないか？

そんな俺の気持ちを余所に、リーシェの顔がみるみる真っ赤に。

「王様、私も王様に出会えてよかったです」

「えっ？」

「正直、不安だったんですこの魔王としての秘書の仕事」

「えっ？ ど、どうして？」

「王様の前に何人が補佐をしたんですけど、上手くいかなくて。

それで本当は王様の秘書は別の人がやる予定だったんですけど」

「けど？」

「王様が人間だと分かると、その人は辞退したんです。それで急遽私がやる事になったんです」

知らなかった。

リーシェは確かにちよつとドジというか、破天荒なところはあるが、それでもしつかりと秘書らしい仕事はきっちりこなしていた。

初めて見せるリーシェの影の部分。

「でも実際出会ってみて、王様はとても素晴らしい人でした。

私が失敗しても励ましてくれたり、親切にしてくれてとても嬉しかったです」

「リーシェ……」

話しているうちに、俺の全身が半透明になっていく。

時計を見ると、既に残り時間1時間ほどになっていた。

リーシェがおもむろに俺の方に近づいてきた。

そして、王座の隣にちょこんと座る。

俺はそんなリーシェを見て、王座から立ち上がり、リーシェの横に座る。

「もうすぐ時間ですね、王様」

「うん。……あつ、そうだ」

俺はポケットをガサガサと探る。

そして、一つの小さな箱を取り出し、リーシェに手渡す。

「王様、これは？」

「以前、リーシェにクリスマスプレゼントもらっただろ？ それのお返しを

してなかったから、この十日間で何かリーシェにプレゼントをさがしてたんだ

良かったら、開けてみて」

ガサガサとラッピングされた箱を開けると、中からは手のひらサイズの小さな箱が出てきた。

「これは……オルゴールですか？」

「そう。もうちょっと指輪とかペンダントとかリーシェに合いそうなものが

買いたかったんだけど……」

残念ながら俺の資金ではコレが精一杯でした。

そんなしよばいプレゼントでも、リーシェは嬉しそうな顔をしてくれた。

箱を開くと、陶器製の男女が立って手を繋いだ状態で固まっていた。そして、横に付属してあるねじをゆっくりとリーシェは回し始める。カタカタと音を立てながら陶器の男女がゆっくりと回る。

そして広間に心地よく、安らぎの音楽が響き渡る。

俺とリーシェは肩を並べてオルゴールを見つめていた。

一秒が何分にも感じられる。

そんなとき、不意にリーシェが俺の手を握ってきた。

俺はその行動に少々戸惑ったが、俺は無言でリーシェの手を握り返す。

手を繋いだ状態で何も話せずに刻々と時間は過ぎていった。そして……。

「！ 王様！？」

リーシェが突然叫ぶ。

さっきまで繋いでいた手が消えてしまったのだ。見れば俺の体がほとんど透けてしまっていた。もう、両の腕はなくなっていた。

これではリーシェに触れることすらできない。そんな俺にリーシェは。

「！？ り、リーシェ！？」

「嫌！ 行かないでください！」

必死に俺の体にしがみついていた。目にはうつすらと涙を浮かべていた。その涙を俺は拭うことすらできない。そんなリーシェの表情を見た俺は。

「リーシェ……好きだ」

自分でもなぜこんな事を言っているのか分からなかった。

十日前には思いを告げずに別れようと決めていたにも関わらず。

そんな俺の言葉にリーシェは目を丸くする。

そして、一瞬、くしゃくしゃの顔になった後。

「私も……好きです！ 大好きです！ 王様！」

そして、俺達は自然と口付けを交わした。

二人共涙を流しながら交わした口付け。

甘く、切なく、最初で最後のキス。

そして、俺は元の世界に戻っていった……。

最終話「それから……」

「いっやつほおおー！」

けたたましい叫び声上がる。

グラウンドには喜ぶ姿と、悲しむ姿の両者の姿が見えた。

我が母校のサッカーのユニフォームを着た男が俺に駆け寄ってくる。

「おい！ 見たかよ！？ ついに一回戦突破したぞ！？」

「おー、オメデトウ。んじゃ、今日は一志のおごりで焼肉な？」

「バカヤロウ！ なんで俺のおごりになるんだよ！？」

一志は笑いながら俺にヘッドロックをかましてくる。

俺は今、一志のサッカーの試合の応援に来ていた。

あのアリシユレードの体験から一年……いや、正確には『一日』だ。

俺は元の世界に戻ると、なぜかパジャマ姿で寝ていた。

急いで俺は両親に話を聞くと。

「何言ってるのよ？ 丸一日ぐっすり寝ていただけよ？ 幸い、昨日は
休日だから良かったものの」

と、ため息をつきながら母親は語る。

夢？ と思って自分の部屋に戻ると、ある物を発見する。

「これは……リーシェの編んだ手袋？」

はめてみると、相変わらずのブカブカ。

その時、俺はあの出来事は現実のものだったと確信した。
ただ、時間の流れだけが違うだけで。

だが、そのおかげで俺は今までどおりの生活に戻れたわけだ。

「よし、このまま一気にプロに駆け上がってやるぞ！」

などと、目の前で凄まじい事をおっしやる友人。

だが、この十年後に彼はプロサッカーの「監督」として目覚ましい活躍をすることを

知る由もなかった。

「おー、頑張れよー。夢は頑張れば叶うよ」

「おう。修もさっさと夢見つけるよ？」

「……いや、俺の夢はもう叶ったんだ」

「あん？ お前もしかして、俺が一回戦突破するのが夢だったのか
！？」

「そんな訳ないだろ！ それとは違うけど、もう叶ったんだよ」
「？」

俺は雲ひとつない青空を見上げてあの時の事を振り返る。

そして、俺はゆっくりと身体を伸ばし。

「まあ、後は俺自身の気持ち次第。これからの事は、なるようになるか」

俺は前に向かって歩き出した。

少しずつ、ゆっくりと確実に。

-
f
i
n
-

最終話「それから……」（後書き）

『なるようになれ』 如何だったでしょうか？

読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました。

少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

次に投稿した作品も読んでいただけるようにがんばっていきたいとおもいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8144c/>

なるようになれ

2010年10月17日13時07分発行